



夏、恋、雲、そしてヨーロッパ

旅する  
メロディ

Yoshiya Torii



# 旅するメロディ

Yoshiya Torii

著者：Yoshiya Torii

表紙・本文デザイン / 写真：Yoshiya Torii

製作：Art melody novel

印刷：日本

加筆改訂版

複製禁止

Writing information:

The 1st draft: October 14, 2011

The 39th draft: November 22, 2022

旅の空の下

若者は独り、ベンチに腰掛け

雲を眺めていた

夏の青空に

ぽっかりと浮かんだ白い雲は

少しずつ形を変えながら

ゆっくりと流れていた



舞台は夏のヨーロッパ

ロンドン、ダブリン

エジンバラ、アムステルダム

ベルリン、チューリッヒ、ベニス

リスボン、ポンテヴェドラ

そしてパリ



それは旅と出会いと恋の物語

## ♪ Prologue

僕は煙突を見ていた。夏の青空にまっすぐに突き出した、レンガ造りの煙突を。初め黒かった煙は、やがて白い色へと変わった。姉は本当に逝ってしまったんだな、僕はそう思った。

暑かったその日、昼の気温は 30 度を超えていた。姉の亡骸は火葬され、小さな墓地の一角に納められた。やがて、姉の葬儀に参列していた親戚や知人達が皆、帰って行った。

僕は独り、墓石を眺めていた。トンボが飛んできて、その墓石のてっぺんにとまった。僕が人差し指を差し出してじっとしていると、今度は僕の指にとまった。僕は動かないでじっとしていた。トンボも羽を深く下ろし、じっとしていた。

どこからともなく、さわやかな風が吹いてきて、僕の首すじをなでていった。トンボはその風に乗って、ふわりと舞い上がり、どこかへ飛んでいった。

「ありがとう」と僕は小さく呟いた。

## ♪ Childhood

お墓から姉の住んでいた家までは、歩いて 15 分ぐらいだろうか。僕は子供の頃を思い出しながら、その懐かしい道を独りで歩いた。空に目をやると、さっきまでの青空は消えていた。遠くに見えていた入道雲も見えなくなっていた。かわりに、どんよりとした灰色の雲が、空一面を覆っていた。

帰り道の途中には神社がある。正月や秋祭りのときには賑わうこの神社。夏の平日の午後には誰もいない。せみの鳴き声だけが広い境内に響いていた。



まだ僕が子供の頃、姉は大きな狸のシippoを作ってくれた。裁縫が得意だった姉は、ときおり、そういった遊び心のあるものを作ってくれた。幼い僕は、その大きなシippoを紐でおしりにつけて、大喜びして家の中を走り回った。姉はそんな僕の手を引いて、神社に連れて行ってくれた。

僕はさらにうれしくなって、神社の境内を走り回ってはしゃいだ。姉は僕を追いかけて、一緒になって笑っていた。

いつも神社の帰りには、駄菓子屋さんでオレンジジュースを買ってくれた。二人でお店の前にあるベンチに腰

を下ろす。僕は地面に届かない足をぶらんぶらんさせていた。姉はすらりと長い脚を組んで座っていた。僕は脚の長い姉を誇らしく思った。

「僕も大きくなったら、お姉ちゃんみたいに足が地面に届くようになる？」と訊く僕に、姉は

「もちろんよ、ジュン。あなたなら大きく遅くなるわよ。脚だってお姉ちゃんよりずっと長くなるわ。でも、あわてなくていいのよ。ゆっくり大人になってね」と言った。

あるとき、急な夕立に合い、神社の軒下で、姉と二人で雨宿りをした。雨が上がると、鳥居の向こうの遠くの空に、大きな虹がかかっていた。

「きれいな虹だね、お姉ちゃん。虹の向こうには何があるの？」

「さあ、何があるのかしらね。お姉ちゃんもわからないわ。行ってみたいなあ、虹の向こうへ」姉は遠くを見つめてそう言った。

その横顔は、いつもの姉とは違って見えた。それは僕を少し不安にさせた。今思えば、それは、いつもの姉の顔ではなく、大人の女性の横顔だった。姉は僕の気持ちを察したように言った。

「ジュンが大きくなったら、虹の向こうにお姉ちゃんを連れていってくれる？」

「うん、いいよ。僕が連れていってあげる。ねえ、お姉

ちゃん。虹に願い事をするとうんでしょ？」

「それは流れ星よ。流れ星を見たら、願い事をするの」と姉はにっこり微笑んだ。

「虹じゃだめなの？あんなにきれいなのに」と僕は少しがっかりした。

「そうね。じゃあ、お願いしてみたら。叶うかもしれないわね。お姉ちゃんも一緒をお願いしてみるわ」

僕は大きな声で「お姉ちゃんと、ずーと一緒にいられますように」と言った。

すると姉はくすくすと笑って、

「うれしいわあ。お姉ちゃん、うれしい。でもね、ジュン。いつかジュンにも大好きな娘ができるわ。そしたら、その娘と一緒にいてあげないとね」

それを聞いて、僕は少し不満そうな顔をした。すると、

「わかったわ、大丈夫。お姉ちゃんはいつもそばにいてあげるから」

「ホント！ よかった」僕は、いつもそばにいてあげる、という姉の言葉にとっても安心した。



懐かしい神社を通り過ぎて、橋を渡り、歩いていくと駄菓子屋さんが見えてきた。今はもう、この店も営業していない。店の前には、古くなりボロボロになった、木のベンチが置かれていた。子供の頃に座ったあのベンチだろうか。



ちょうど、その店の前まで来たときに、雨が突然降り出した。夏の夕方の激しい夕立だ。遠くでは雷がごう音をとどろかせ、ときおり稲妻が走った。

僕は雨宿りのためにお店の軒下に走りこんだ。そして、そのベンチの真ん中に腰を下ろした。あんなに大きかったベンチは、今の僕にはとても小さく感じられた。

僕はベンチの右端に座りなおした。そして、足を軽く浮かせて、ぶらんぶらんさせてみた。

雨はますます強くなっていった。店の前の軽い傾斜のある道を、雨水が川のように流れていった。その中を、コガネムシが一匹、滑るように流されていく。

遠くで鳴っていた雷の音は、だんだんと近づいているようだった。雨音は大きく、激しくなっていった。

## ♪ Hometown

その日の午後、僕は成田空港のラウンジにいた。

6月中旬。梅雨の晴れ間で、外は蒸し暑さを感じる。僕の搭乗するロンドン行きの便は、2時間後に出発だ。僕は、去年の春から自分の身のまわりで起きたさまざまなことを、思い出していた。



去年の春、僕は頻繁に姉のもとを訪れていた。僕は18歳まで姉と二人で暮らしていた。その後、東京へ出て働き始めた。最初の頃はよく、姉と暮らした家へ顔を出していた。しかし、徐々に仕事が忙しくなっていった。そして彼女ができてからは、姉の家を訪れることも少なくなっていた。

姉は筆まめな人で、よく手紙を書いてきた。僕はたまにしか返事を書かなかったが、それでもよく手紙をくれた。

「自分のやりたいことをやりなさい。好きなことなら一生懸命がんばりなさい」そう言っていつも僕をはげましてくれた。

僕が姉の家を出てからちょうど10年たったあの春。姉は病院のベッドに横になっていた。僕が顔を見せると、いつも満面の笑みで迎えてくれた。

ある日、姉は言った。

「元気になったら旅行に行きたいなあ。どこがいいかしら。海外も素敵かな」

「海外かあ。いいかもね。行ってくれば。夏には体調も良くなってるだろうし」と僕。

「私ね、ヨーロッパに行ってみたいんだ。ロンドンとかパリ。ジュン、あなたも一緒に行ってくれる？」

「もちろん、いいよ。夏休みをとれるから。有給を合わせて取れば、2週間は休めるからね。そうかあ、海外旅行か。楽しみだね」

「よかった。私、英語もフランス語も全然だめだから。ジュンがいれば安心ね。あなた、外国語、得意でしょ」

「まあ、英会話くらいだったら大丈夫だよ。でもフランス語はまるでだめだよ」

と僕は答えた。

その日の姉は体調が良く、いろいろな話をした。

僕達が暮らした家は二階建ての小さな家で、玄関の前には小さな庭があった。花や庭いじりが好きだった姉は、いろいろな花を植えていた。自分が留守にしている間に、その花が枯れてしまわないかと、心配しているようだった。

「僕が帰りに家に寄って様子を見ておくから、心配ないよ。ちゃんと花に水をあげておくからさ」

「そんな時間あるの？帰りの電車に間に合う？」と心

配する姉。

「大丈夫。今日は遅めの便で予約してあるから。じゃあ、そろそろ帰るよ。風が冷たくなってくるから、窓閉めるね」そう言って僕は立ち上がり、窓辺に向かった。

すると姉は、

「もう少し、開けておいて。今日の風はとっても気持ちがいいから。あとで閉めてもらうから大丈夫」

そして、別れ際に、「あっ、ジュン。旅行のガイドブック買ってきくれる？今度来るとき。パリかロンドンのね」そう言って少女のような笑顔を見せた。

僕は約束どおり、旅行ガイドブックを姉に買っていつてあげた。ロンドンとパリの旅行ガイドブックを。姉はとても喜んでくれた。そして何度も何度も読み返していた。

パリのどこのこの通りには有名なレストランがあって、そこで食事をするとっていた。姉はそのガイドブックに、書き込みをしているようだった。そしてすでに、具体的な旅のイメージができあがっているようだった。

一度、僕がそのガイドブックを読もうとしたことがある。

すると姉は、「これは私の宝物だから見せてあげない」そう言って、大事そうに両腕で抱え込んだ。そして少女のようなうれしそうな笑顔を見せた。



それからしばらくして、姉は他界した。それは夏の日のことだった。僕と17歳、年が離れていた姉は、そのとき40代の半ばだった。最後まで、魅力的で凛とした、美しい女性だった。

姉の死後、僕はあのガイドブックを初めて開いてみた。そこには、沢山のメモが書かれていた。僕と訪れる予定の名所やレストランに印が付けられていた。

姉はもう、先が長くないことを知っていたのかもしれない。だからこのガイドブックの中で、姉は僕と旅をしていたのだろう。この本は僕との最後の思い出だったのかもしれない。僕はなぜかそう思った。

姉が亡くなった翌年の春、僕は勤めていた会社を辞めた。つぎにするべきことは何も決めてはいなかった。僕は東京のアパートを引き払って、故郷にある姉と暮らした家に戻ってきた。姉がいたころと家の中は何も変わってはいない。机も鏡台も本棚もあの頃のままだ。

姉が好きだった木製のリクライニングチェアに腰掛けて、僕は窓の外を眺めていた。あの日と同じように気持ち良い春風が吹いていた。

そよ風によって、ギターの奏でる心地よいメロディが聞こえてきた。近くにある学生が住むアパートからだろうか。そういえば、うちにもギターがあったな、そう思って押入れの中を探すと、赤いチェックの布ケースに入ったクラシックギターが出てきた。

僕がまだ小さい頃、姉はよく、僕にギターを弾いて聴かせてくれた。姉の細く長い指はいつもなめらかに、滑るようにギターの指板を動いた。僕は、それを見ると、姉が何か特別な魔法を使っているような気がした。

そのギターはほとんど壊れかけていた。ペグは取れかけ、ネックの後ろにはひびが入っていた。もう、メロディを奏することはできないだろう。それでも僕は、そのギターのほこりを払い、ハンカチできれいに磨いた。それを大事に両腕に抱え、リクライニングチェアに腰を下ろした。そして、そっと目を閉じた。春風が運んでくるギターのメロディが聴こえていた。

それからしばらくして、僕は新しいギターを手に入れた。それはとても小さなギターだった。

## ♪ London

ロンドンのアールズコート駅近くにあるドミトリー。

そこが、僕のロンドンでの滞在先になった。湿度がなく、涼しくて過ごしやすい気候。

その日、ドミトリーの食堂で簡単な朝食を食べた後、僕はラウンジのソファに座っていた。持参した旅行ガイドブックのページをめくりながら、その日の予定を考えていた。ラウンジの窓の向こうでは、陽の光をあびた草木がかすかに揺れていた。

ガイドブックには印が付けてあった。リージェンツパーク、ハイドパーク、グリーンパーク。どれも公園だ。花や緑が好きだった姉は、ロンドンの公園を訪れることを楽しみにしていた。

ロンドンの公園かぁ、どんなところだろう。僕はガイドブックから目を離し、窓の外を見た。いつの間にか、小雨が降り出していた。聞いていたとおり、ロンドンは天気が変わりやすい。

「公園はまた、明日にしよう。大英博物館にでも行ってみようか。そこでのんびり一日過ごすのも悪くないなあ」僕は独り言を呟き、傍らに置いてあったギターを手にした。念入りに弦のピッチを合わせる。そして、窓の外の景色を見ながら2、3曲軽く爪弾いた。すると、となり

のソファに座っていた女性が軽く拍手をしてくれた。

そして「素敵なお曲ね」と言った。それが、彼女との最初の出会いだった。

彼女の名前はエイミー。21歳のアメリカ人大学生だ。夏休みにロンドンに一人で観光にやってきた、と言った。

「あなたは？」と訊く彼女に、

「雑誌の編集者。でも今はただの旅行者だよ」と僕は答えた。

彼女は僕のギターに興味があるらしい。

「ずいぶんと、小さいわね。それってギター？」

「うん、そうだよ。旅をするのに便利な小さいギターさ」と僕。ギターを手渡すと、彼女は弾き始めた。それは、「カントリーロード」だった。久しぶりに聴いた懐かしい曲。

僕が、これから大英博物館に行くつもりだと言うと、彼女も一緒に行きたいと言った。

「ツタンカーメンの黄金のマスクに興味があるの？」とからかう僕。

彼女は、くすっと笑った。「それって、今はエジプトにあるのよ。知らなかった？」

「そうだったんだ。知らなかった」と僕もつられて笑った。

時計を見ると10時少し前だった。

彼女は僕にギターを手渡ししながら、「11時にここで待



ち合わせはどう？」と言った。うなづく僕。

「じゃあ、またあとでね」そう言って、彼女は立ち上がり部屋へ戻っていった。立ち上がった彼女は、すらりと背が高かった。長い足でタイトなジーンズを穿きこなし、後ろに束ねた長い髪が揺れていた。

僕も一度、部屋へ戻り、約束の時間にラウンジに戻ってきた。彼女の姿はまだ見えない。僕はギターを爪弾きながら、窓の外を眺めていた。まだ、小雨が降っている。11時半を過ぎても彼女は現れなかった。

大英博物館は独りで行こう。僕は立ち上がり、ラウンジを後にした。



翌日も朝から雨だった。今日はどうやって過ごすか。同室には南アフリカから来た青年。彼は仕事を探しに来たと言っていた。フランスから来た青年はバーテンダー。ロンドンでの生活を終え、フランスに帰ると言う。フラットを引き払い、帰国の日までここで過ごす、と言っていた。ベルギーから観光にやってきた学生は、ロンドンの町に興奮ぎみ。彼らは朝早くからさっさと出かけてしまった。

僕は食堂で朝食を食べ、部屋に戻り、一人であれこれ考えていた。昨日、訪れた大英博物館。あそこは、かつての英国の繁栄の歴史でもある。人は見知らぬ土地へ行って、何かを発見したいと思うのだろう。それは財宝だ

けではない。そこに住む人との出会いもあるだろう。何かを成し遂げた、という達成感かもしれない。

あそこにある貴重な品々にはそういった人々の思いも込められているのだろう。旅先で写真を撮るのも似ているな、そう僕は思った。新しい発見、出会い、達成感。そうした思いが旅の写真には込められている。

それはある意味、宝物だ。だから、旅の写真を友人に見せたくなるのかもしれない。旅行雑誌の編集者だった頃、沢山のそういった写真を見てきた。

でも、それだけだろうか。恋人や家族との旅行はどうだろう。絆を深める思い出。そこにあるものは達成感だけではないだろう。そしてそれは、一人旅では味わえない時間だ。

その日の僕は、そんな取り留めのない考えが頭の中をめぐっていた。



ロンドンに来て 4 日目。その日は朝から晴れていた。今日こそ、ロンドンを散策しよう。といっても、公園めぐりが目的なのだが。

リージェンツパーク、ハイドパーク、ケンジントンガーデンズ。グリーンパーク、そしてセントジェームズパーク。僕は一人で公園めぐりを楽しんだ。

グリーンパークの一角にある、芝生で覆われたなだらかな斜面。そこが僕のお気に入りとなった。木々の葉が

頭上を覆っている。やわらかい木漏れ日。僕は大的字になって寝ころんだ。周囲には誰もいない。目を閉じると鳥のさえずりが聞こえてきた。

それはとても気持ちの良い時間。目を閉じると、五感の視覚以外が敏感になる。指先に感じる芝生の短い草の触感。鳥のさえずりは、より近くに感じる。大きく息を吸い込むと、草木の匂いをはっきり感じる。子供のころ、庭で嗅いだ懐かしい匂いだ。

僕はうとうととしながら、あの日のことを思い出していた。姉のお気に入りのリクライニングチェアに座ってまどろんでいたあの日。あの日、窓の外から聞こえてきた曲。それは「ダニーボーイ」 僕の頭の中であの曲が繰り返し流れていた。

どれくらい目を閉じていただろう。30分か、1時間か。空を見上げると木々の葉の向こうには、まだ青空が見えていた。僕は起き上がって座りなおし、ギターを手に取った。そして、ダニーボーイを弾き始めた。その後、何曲が弾いた。そして、また、ダニーボーイを弾き始めた。

気がつくと、少し離れたところに親子連れが立っていた。男の子は10才くらいだろうか。お父さんと手をつないでいる。二人はゆっくり近づいてきた。

「やあ、こんにちは。それは、ギターかい？」と父親。

「そうだよ」と答える僕。

彼は、「その小さいギターを売ってくれないか？息子へ

のプレゼントにしたいんだ」と言った。

僕は、「これは大切な旅の相棒だから、売ることはできないんだ」と答えた。

「どこから来たんだい？」

「日本から」

少年は僕達のやりとりを黙って見ている。

「こんにちは。弾いてごらん」と声を掛けて、僕は少年にギターを手渡した。彼は、いつくかの簡単なギターコードを知っていた。そして、一生懸命、ギターを弾き始めた。父親はその様子を黙って見つめていた。3分か、5分か。もっと短い時間だったかもしれない。

父親は息子に「もう行くよ」と言った。うながされた男の子は立ち上がり、ギターを僕に手渡し、「ありがとう」と言った。父親も「ありがとう」と言った。そして僕に背を向けて歩き出した。

少し歩いてから、二人は振り返り、僕に手を振った。僕も立ち上がって手を振り、二人を見送った。なぜだろうか、その後ろ姿がととてもさびしく見えた。



その日、僕はテムズ川のほとりにいた。川沿いのベンチに座り、遠くを見ていた。対岸のロンドンアイはゆっくり回っていた。雲一つない青空がその向こう側まで広がっていた。かれこれ、このベンチに座って1時間ほどになる。僕は川の流れや船の行き来を眺めていた。

遠くから女性が一人、近づいてきた。やがて、僕のいるベンチで立ち止まる。そう。それはアメリカから来た学生のエイミーだった。

僕が待ちぼうけをくったあの日。その数日後、僕は偶然、また、ラウンジで彼女に出会った。そのとき、彼女は、あの日のことを謝ってくれた。僕は、彼女に理由は訊ねなかった。

彼女は、「今度こそ、一緒にどこか行きましょう」と言った。

そんな彼女に僕は言った。

「明日はどう？テムズ川のほとりのベンチで待ってるよ。天気がよければね。ロンドンアイが対岸に見えるあたり」

「ロンドンアイ？」

「大きな観覧車」

「あー、知ってるわ。今年のみレニウムイヤーを祝うために建てられたっていうやつね。」

「そう。ロンドンアイを見ながら待ってるよ。昼ごろでどう？」

「わかった」

僕は雑把な場所と時間を彼女に伝えた。そして約束の日、僕はそのベンチに座っていたのだ。

「こんにちは、ジュン」

「こんにちは、エイミー」

「今日はいいい天気ね。どこへ行こうか？」と彼女。

僕は、「少し歩こうか」と言って立ち上がった。

彼女は、この数日、いろいろ観光してきたと言っていた。ビッグベン、ウェストミンスター寺院、トラファルガー広場。ノッティングヒルにも行ってきた、と言った。

僕は、公園に行こう、と言った。そう、グリーンパーク。僕がロンドンで気に入った場所の一つだ。途中、喉が渴いたので、とあるパブに向かった。

その名もザ・シャーロック・ホームズ。彼女の持っていた旅行ガイドブックにあったパブだ。僕達はその店を見つけられずに、道に迷ってしまった。彼女は、歩道にあった赤い電話ボックスからその店に電話をかけた。電話の相手に彼女は、

「私はシャーロック・ホームズの大ファンで、そのパブに行くためにはるばるアメリカからやってきたの」と言っていた。

電話を切った彼女に、僕は、

「そんなにシャーロック・ホームズのファンなの？」と訊いた。

「そうなの、あの帽子とパイプ姿が大好き！」

「本当に？」

「冗談よ。そのくらい言っとけば、お店で何かサービスしてくれるかな、って思っただけよ」そう言って彼女は笑った。

パブで喉の渇きをいやしたあと、僕達はグリーンパークへと向かった。僕は、彼女を公園の中の僕のお気に入りの場所へと、連れて行った。

「ここが僕のお気に入りの場所さ」そう言って僕は芝生の上に腰を下ろした。

「気持ちのいいところね」彼女は僕のとなりにすわり、遠くを見ながらそう言った。

しばらくして、「ねえ、ジュン。何か弾いて聴かせて」と彼女。

僕は適当に何曲か弾いてあげた。遠くからは鳥のさえずりが聞こえていた。

「ねえ、ジュン。あなたはなぜ、ロンドンに来たの？観光って言ってたけど、他にもいろいろな町や都市、国があるじゃない？」

「シャーロック・ホームズが好きなんだろう。推理して当ててみてよ」僕はからかうように彼女に言った。

「わかったわ。なぞを解いてみせるわ」そう言って彼女は笑った。そう言ったまま彼女は遠くを見ていた。

「ねえ。わかった？」と僕は、彼女の答えに待ちくたびれて訊いた。

「うーん。わからないわ。人の心を読むのは難しいわ。私には、探偵は無理ね。ねえ、なぜ、ロンドンだったの？」

僕は少し考えて答えた。

「そうだね。なんとなくかなあ。エイミーはどうして

ロンドンに？」

「私もなんとなくかなあ」彼女の視線は、まだ遠くを見ているようだった。

僕はまた、彼女の傍らでギターを弾きだした。

「あっ、その曲知ってる。ダニーボーイでしょ」

僕は彼女に微笑みでうなずき、ギターを弾き続けた。

ちょうどそのとき、誰かが走ってきて僕達の前で立ち止まった。そこには、少年が立っていた。先日ここで出会った、あの少年だ。

「ハイ！」と彼は言った。僕も彼女も少し驚きながら、「ハイ！」と返す。少年は僕達の前に腰を下ろした。僕はギターを彼に手渡した。彼はこの前のときと同じようにギターを弾き始めた。

僕は、先日、彼とここで出会ったことを彼女に教えてあげた。

「ギターは誰に習ったの？」と彼女は少年に訊いた。

「お父さん。すごく上手いんだよ」

彼はつたない指さばきで、一生懸命ギターを弾いていた。僕も彼女もそんな彼をじっと見ていた。

「今日はお父さんと一緒じゃないの？」

僕の問いかけに彼は無言だった。夢中でギターを奏でていた。

僕は少年の奏でるギターの音色と鳥のさえずり、そして柔らかい陽の光を浴びて、おだやかな時間を感じてい



た。彼女の横顔はとてもここちよさそうに見えた。

そのおだやかな時間の流れを止めたのは少年の涙だった。気がつくと、彼はギターを弾きながら、涙を流していた。彼女もそれに気づいたようだ。驚いて僕の顔を見た。僕は無言だった。やがて、少年はギターを弾く手を止めた。そして黙ったまま、うつむいた。僕達三人は、ただ黙っていた。遠くで犬の吠える声がしていた。

「知っているかい？ギターの音色は、そよ風にのって旅をするんだ。ずっとずっと遠くまでね。心の思いはね、指先を通して、メロディになるんだ。そして、伝えたい人のところまで飛んでいくんだよ」そう言って僕は少年に語りかけた。

「本当に？」と少年は僕を見た。

「そうだよ」と答える僕。

「アイルランドまで飛んでいくかな？」

「うん」僕は大きくなずいた。

「だって、アイルランドは海の向こうだよ」

「大丈夫。心を込めて弾いてごらん」と僕は答えた。

少年はまた、ギターを弾き始めた。指板を見ながら、一生懸命に指を動かした。ゆっくりと静かに、心を込めて。一曲弾き終わると、少年は空を仰ぎみた。そして僕の顔を見た。そこには穏やかな少年の笑顔があった。

「飛んでいったかな？」と少年は僕に訊いた。

「うん、大丈夫」と僕は少年を元気づけるように言っ

た。

「そうだよね。飛んでいったよね」少年は自分自身に語りかけるように呟いた。

「うん、きっとね」そう言って僕も空を仰ぎ見た。少し雲が出てきたが、頭上の木々の向こうには、まだ青空が広がっていた。

少年はすくっと立ち上がった。そして「じゃあね！」そう言って、来たときと同じように走っていった。僕と彼女は少年の後ろ姿を見送った。少年は立ち止まらず、振り向かず、去っていった。



僕は彼女に、先日の出来事を話した。少年はその日、父親と一緒にいたことを。二人の去っていく後ろ姿がさみしそだったことを。

彼女はしばらく無言だった。そして静かに話し始めた。

彼女の母親はアメリカ人だが、父親はイギリス人。母は若い頃、イギリスに留学していた。

そして、イギリス人の男性に出会って恋をした。その男性がエイミーの父親だ。しかし、やがて二人は別々の道を歩くことになったという。

大学の夏休み、エイミーは父親に会うためにロンドンにやってきた。父親は、娘がロンドンに滞在していることを知っていた。彼女の母親が父親に連絡をしてくれたからだ。

「勇気を出して、ロンドンまで来たのよ。でも、いざとなったら、急に臆病になっちゃって。だってそうでしょ。父親がどんな人か全然知らないんだから。ジュンと約束したあの朝、部屋に戻ったら携帯電話に着信があったの。父からだった。お母さんから聞いていた父の電話番号だったの。でも、電話に出ることができなかったわ。どうしていいのかわからなくなっちゃったのよ。それで、ジュンとの約束をすっぽかしちゃったのよ。あの時はごめんね」

「そうかあ。そんなことがあったんだ。大変だったね」

「でも、少し勇気が出たかも。あの少年を見ていたらね。うん。もう大丈夫。せっかくロンドンまで来たんだし」と彼女は、自分自身を励ますように言った。

「そうかあ」と僕は彼女の横顔を見た。

「うん、きっと大丈夫。ねえ、ジュン。ギター貸して。私もちょっと弾いてみる」そう言って、彼女はギターを爪弾き始めた。

僕は彼女の傍らで、大の字になって、目を閉じた。彼女の奏でるメロディを聴きながら、僕は考えていた。

「アイルランドかあ。どんなところだろう」

## ♪ Dublin

トリニティカレッジの一角にあるベンチ。僕は腰を下ろし雲を見ていた。雲は少しずつ形を変えながら、ゆっくりと流れていった。



ダブリンにあるトリニティカレッジは、アイルランド一の歴史を誇る由緒ある大学。夏休み中なのだろうか、人の姿はまばらだ。僕はキャンパス内を散策していた。とある建物のドアに一枚のポスターが貼ってあった。学生による夏の音楽イベントだ。一色刷りのポスター。ギターのイラストが大きく描かれていた。シンプルだがインパクトのあるデザイン。

そのとき、後ろから声が聞こえた。

「あなた、ここの学生？」

振り返ると女性が立っていた。薄い水色のブラウスに膝丈のスカート。足元はヒールを履いている。肩からは花柄のトートバッグを掛けていた。

「違うけど…」

「キャンパス内は部外者立ち入り禁止なのよ」

僕は突然のことに戸惑い、言葉が見つからなかった。少しの沈黙。その沈黙を破ったのは彼女だった。

「冗談よ。私はナターリア。よろしくね」と人懐っこ

い笑顔で言った。

「ごめんね。驚いた？」

「あっ、うん…」

「ねえ、あなた。どこから来たの？」

「日本から…」

これが、彼女との出会いだった。僕達は、キャンパス内をぶらぶらと歩きながら話をした。彼女はこの大学の学生。ポーランドからの留学生だ。ビジネスと経済について勉強しているという。僕は日本からの旅行者。ロンドン、リバプールとめぐり、フェリーで一昨日、ダブリンに着いたと自己紹介。

「ねえ、それってギター？」

「うん」

「あなた、プロのミュージシャンなの？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。ただ、ギターを持って旅をしているだけ」

「へえ、面白いわね。素敵！」そう言って、彼女は目をキラキラさせた。彼女はこれから、図書館に行くところだと言った。経済の本を借りに行くという。

「夏休みなのに、いっぱいレポートを書かなきゃならないのよ」

彼女は「いっぱい」を強調して言った。

気がつくと、僕達はキャンパス内の一角にあるベンチの前まで来ていた。

「今日はこれからどうするの？」と訊く彼女。

「特に予定はないんだ」と僕。

「じゃあ、30分後にここで待ち合わせね。それまで、適当にキャンパス内を見てまわって。私、急いで本を探してくるわ」そう言って、行ってしまった。元気な娘だなあ、と僕は思った。



僕はキャンパス内を一人で見てまわった。人の少ないキャンパス。芝生で覆われた広いグラウンドでは、青い作業服の作業員が二人、芝刈りをしている。緑の芝生に赤い芝刈り機。空には大きな雲が一つ浮かんでいた。

ぶらぶらとキャンパス内を歩いたあと、僕はさっきのベンチに戻ってきた。まだ彼女の姿は見えない。大きな雲が、まだ空に浮かんでいた。時計に目をやると、午後の3時になっていた。ちょうどそのとき、彼女が戻ってきた。

「ごめんなさい。待たせちゃった？」

そう言って、彼女は僕に近づいてきた。そしてバッグからカメラを取り出しレンズを僕に向け、すばやくシャッターを切った。あまりの素早い彼女の動きに、少し驚いた僕。

「デジタルカメラ？」

「そうよ。いつも持ち歩いてるの。ねえ、これを見て」そう言って僕に、撮ったばかりの写真を見せてくれた。

そこに写っていたのは、ベンチに座った一人の日本人。ブルージーンズにグレーのTシャツ。そして少しくたびれたスニーカー。それは、日本を出発したときより、少し日焼けした姿の僕だった。

「ねえ、これからどうするの？」と訊く僕に、彼女はにっこり微笑んで言った。

「私にまかせて」

彼女は僕を近くの観光名所に連れて行ってくれた。ダブリン城、聖パトリック大聖堂、クライストチャーチ大聖堂。ヨーロッパの石造りの城や教会は僕にとってはとても新鮮だった。僕は彼女の案内のままについてまわった。

「ダブリンは長いの？ ナターリア」

「ちょうど2年かな。エキサイティングで面白い街よ」

その頃の 아일랜드 は、セルティックタイガーと呼ばれる急速な経済成長の中にあった。

「そうね、つぎはグラフトンストリートへ行きましょう」と彼女は言った。

グラフトンストリートはパブやカフェ、ショップが集まるダブリンのメインストリートだ。通りのあちこちではストリートミュージシャンが演奏をしている。夏の開放的な雰囲気もあって、そこはエネルギーに満ちあふれていた。

「ジュン、喉が渇かない？ パブがいい、それともカフェ

エ？」

「冷たいアイスコーヒーが飲みたいな」

そして二人は、通り沿いのオープンカフェに落ち着いた。

僕は通りの向こう側で演奏するバンドを見ていた。一人はギターを弾きながら歌を歌っていた。そしてベースとドラムス。3人編成のバンドだ。彼らはビートルズの曲を演奏していた。

「ビートルズ好きなの？」と彼女は、そんな僕を見て言った。

「特に好きってわけじゃないけど、知ってる曲は多いよね。君は？」

「私はね、U2が好き」

「ホント？僕もU2が好きなんだ。ここアイルランド出身だよ」

「そうよ。ダブリン出身なのよ。私が得に好きなのはね、ウィズ オア ウィズアウト ユー。あと、アイ・スティル・ハヴント・ファウンド・ホワット・アム・ルッキング・フォーも好き」

「僕も大好き。それってアルバム『ヨシュア・トゥリー』の曲だよ」

二人はしばし、音楽の話で盛り上がった。その間、ずっとビートルズの曲が聴こえていた。彼女はその間もずっとカメラを手にしていた。そしてときおり僕に向けて



シャッターを切っていた。

「ねえ、ジュン、もっとどこか観光する？」

「今日はいろいろ観てまわったからいいよ。ありがとう。アイルランドではね。ケルト遺跡見たいんだ」と僕。僕がアイルランドを訪れた目的は2つ。ダブリンという街を体験すること。そしてケルト遺跡を観ることだった。

「ケルト遺跡ね。わかったわ。私にまかせて」

彼女は僕を近くのツーリストインフォメーションセンターに連れていった。パンフレットを見ながら、

「バスツアーがあるわ。日帰りツアーと宿泊ツアー。どっちがいい？」と彼女。

「うん、日帰りかな」と僕。

「明日はどう？」

「明日でOKだよ」

「わかったわ。私にまかせて」

彼女はそう言ってカウンターに向かった。そして店員と話始めた。僕は、壁にかかっていたケルト遺跡の大きな写真を、眺めていた。彼女はすぐに戻ってきた。

「明日の朝、8時半から日帰りのバスツアーよ。出発はこのビルの前だって。私、何着ていこうかしら。楽しみね、ジュン」彼女は少しはしゃいでいた。

「えっ、君も一緒なの？」

「あたりまえでしょ。あっ、私と一緒にじゃ、いやだった？」

「ううん、うれしいけど…」とすこし戸惑う僕。

彼女は覗き込むように僕の顔を見た。

「よかった。ツアーは私のおごりね。ツアーの後はパブに行きましょう。そこはジュンがおごってね」

やはり第一印象どおり、元気な娘だ。



翌朝、僕は約束の時間の少し前に待ち合わせ場所に行った。すでに彼女は来ていた。白とオレンジのツートンのTシャツ、ジーンズ、足元は白のスニーカー。

「私、早く来過ぎちゃった」と彼女は元気よく笑った。

しばらくすると、バスツアーのバスがやってきた。バスといっても大型のワンボックスカーだ。すでにいくつかの乗車ポイントをまわってきていた。バスの中には、ドライバーの他に8人が乗っていた。僕達は空いていた最後の二席に並んで座った。

バスツアーではいくつかの遺跡を見てまわった。メリフォントアビーは初期のキリスト教修道院跡。放牧地にある教会跡はモナスターボイス。そこにあったのは装飾のほどこされた大きな十字架。アイルランド独特の十字架「ハイクロス」が印象的だった。

僕達を乗せたバスは、アイルランドの静かな田舎道を走っていた。バスに乗っているメンバーはみな二人連れだった。イギリス人にアイルランド人。ドイツから来た若い女性達もいた。

それに、日本人の僕とポーランド人留学生の彼女。

僕はバスの中で彼女に訊いた。

「ポーランド語で『こんにちは』って何て言うの？」

「ジェン ドブレ！」

僕は彼女の言葉を繰り返した。

「ジェン ドブレ どう？」

「うん、上手よ。ジュン」

「じゃあ、『アイ ライク ユウ』は何て言うの？」

「ルビエ チェ！」

僕はまた、彼女の言葉を繰り返す。

「ルビエ チェ。こんな感じ？」

「そうね。まあまあかな」

「じゃあ、『アイ ラブ ユー』ってどう言うの？」と

僕は続けた。

「コハム チェ！」

「もう一度、言って。ナターリア」

「コハム チェ！」

「もう一度、ゆっくりお願い」

彼女は僕を見て、

「コハム チェ！」ともう一度、ゆっくり言った。

僕はにっこりと笑って彼女を見た。そして

「そんなに僕のこと好きなの？」と言った。

彼女は、一瞬驚いたような顔をして僕を見た。

「だって、何度も『コハム チェ！』『コハム チェ！』

っていうからさ」と言って、僕はいたずらっぽく彼女を見た。

彼女の顔は真っ赤になった。

「もう、何言ってるのよ、ジュン！」

二人の会話を聞いていたバスの中の人達は、くすくすと笑った。

彼女は小声で、「もう。はずかしいからやめてよ」そう言って僕の膝の上に手を置いた。



やがて、僕達は最後の目的地、「タラの丘」へ着いた。アイルランド古代の王達のゆかりの場所だ。まわりは見渡すかぎり続く牧草地。羊の群れが近くに見える。

「ねえ、羊に触ってみない？」

そう言って彼女は羊の群れを指さした。

彼女は羊に近づいていった。僕は彼女の後ろについていった。羊は、近くまで行くと、あと少しというところで逃げてしまう。彼女は何度も挑戦したが、羊に触ることはできない。

「もう、いいわ。ねえ、ジュン。羊をバックに写真を撮って」

と彼女は僕にカメラを手渡した。僕は彼女のカメラで彼女を写した。

「ねえ、ナターリア。あの羊なら、触れるかも」そう言って僕は、一匹の羊を指さした。

彼女のすぐ後ろに羊が一匹、草を食んでいた。彼女は  
その羊に静かに近づいていった。その羊は、他の羊とは  
違った。不思議とその羊は逃げない。彼女はその羊のお  
しりにタッチした。そしてうれしそうに笑いながら戻っ  
てきた。

「がんばった甲斐があったね」と僕も笑った。

「やったわ。羊に触っちゃった」

「ねえ。手を見せて」と言って僕は彼女の手を取った。  
そして手の匂いを嗅ぐしぐさをして言った。

「うわあ、臭い」

「えっ、ホントに？」と彼女は驚いて自分の手の匂い  
を嗅ぐ。そして

「全然、臭くないじゃない」と彼女。

「えー。臭いよー」と僕。

「もう、臭くないわよ。いじわるー」そう言って彼女  
は僕を追いかけてきた。

僕達は何もない草原を思いっきり走り回った。こんな  
に、息を切らして走ったのはいつ以来だろう。彼女と僕  
と羊以外は誰もいない世界。緑色の大地と青い空がどこ  
までも続いていた。



僕達はバスツアーを終えてダブリンに戻った。夕方の  
5 時頃。夏の日差しはまだ強い。街はあいかわらず、活  
気を見せていた。僕達はテンプルバー地区にあるパブに

入る。約束どおり、今度は僕が彼女におごる番だ。二人はギネスビールで乾杯した。

「今日は楽しかったわね」彼女はそう言って、撮った写真を見せてくれた。

そこには、遺跡の写真に混じって、僕を写した写真もあった。「へえ、こんなに沢山、写真を撮ったの？」

「うん、楽しい思い出を残しておきたいから」

そう言って彼女は自分自身について話してくれた。

彼女は子供の頃、親のすすめでバイオリンを習っていた。その後はピアノ。高校時代は陸上競技。どれも長くは続かなかったという。

「私ね。いつも一生懸命がんばるのよ。だけど、うまくいかないのよね」

「そうなんだあ。いろいろな経験をしているんだね」

「ジュンと最初に会ったときね。ジュンが、ギターを持って立っていたでしょ。その後ろ姿を見てたら、子供の頃の自分を思い出したの。バイオリンを習っていた頃をね。それで、どんな人だろうって思って声をかけたのよ」

「あのときはちょっと、驚いたけどね」と僕は思い出して笑った。

「ナターリアはなぜ、留学しようと思ったの？」

「若いうちに外の世界を観ておきたかったの、なんてね。本当は逃げ出しかったのかも。いろいろやっても、

あきらめてしまう自分から。もう少しのところで結果を出せない自分からね。外国に行けば気分も変わるかなって。それに英会話が得意だったから。ロンドンかダブリンがいいなあってね」

「恋愛は？」

「彼とは3ヶ月ぐらいかな。とってもいい人よ。アイルランド人で、彼もこの大学の学生なの。今は夏休みだから、故郷に帰っているわ」そう言って彼の写真を見せてくれた。

「私ね。写真を撮るのが好き。特に人物を撮るのがね。人って夢中になっているとき、すごく輝いて見えるわ。それから、努力しているときの一生懸命な顔も好き。あと、元気な笑顔も大好き。笑顔はみんなを幸せにするわ。今日のジュンは、とってもいい笑顔だったわよ」

濃い茶色い髪ショートヘア。緑がかった青い目。彼女の笑顔も輝いていた。

「ねえ、ダブリンにはいつまでいるの？」

「そうだね。明日か明後日ぐらいかな」と僕は答えた。予定は決めていない旅。僕は、もっといろいろな世界を見てみたい、そんな気分だった。

「そうかあ、残念。明日、明後日は私、約束があって。もっといろいろな所を案内してあげたかったのに」彼女はそう言って、メモをくれた。彼女の連絡先だった。

僕達はパブを出た。彼女はジョッキ3杯飲んでいたが、

足元はしっかりしていた。外はまだ明るい。

しばらくして、彼女と二人、信号の前で立ち止まる。彼女はこの信号を渡って帰る。僕の滞在しているホテルは、彼女の家とは反対方向だ。

彼女は僕に、

「楽しい旅を続けてね。またダブリンに来ることがあったら、いつでも連絡してね」と言った。

「わかった。そのときは必ず連絡するよ」と僕は笑顔で答えた。

信号が変わり、

「じゃあ、またね」と言って、彼女は歩き出した。

僕はその後ろ姿に向かって、

「ポーランド語で『アイ ラブ ユー』って何ていうんだっけ？」と声をかけた。

すると彼女は振り返った。少し顔を赤くして小走りで戻ってきた。きらきらした瞳で、

「からかわないでよ、もう」と言って僕の頬に軽くキスをした。そして小走りで去っていった。信号はすぐに赤に変わった。

「一生懸命がんばる姿かあ。確かにそういう人の姿は魅力的だなあ」

僕は彼女の言葉と、はつらつとした笑顔を思い出していた。そして彼女の姿が小さくなるまで見送った。



## ♪ Edinburgh

目の前に大きな岩山がそびえ立っている。僕がいるのはプリンシズストリートガーデン。緑の芝生がスコットランドの夏の日差しを浴びて輝いている。木製のしっかりとした造りのベンチが公園内を抜ける小道の両側に並んでいた。

どんよりと曇って雨が降り出しそうだった昨日。肌寒さで僕は長袖シャツの上から薄手のブルズンを羽織っていた。今日は、ところどころ晴れ間が見えている。日差しは暖かい。僕はブルズンを脱いでベンチに腰を下ろし日差しを全身に浴びていた。そして目の前にそびえ立つ岩山とその上に建つエジンバラ城を眺めていた。それは圧倒的な存在感。昨日、そのお城を見学に行ったときには、岩山のとっぺんに建つ城の場内から眼下に広がる街並を見ていた。そして今、下から見上げたときのエジンバラ城の姿はそれ以上に圧巻だ。スコットランドの首都エジンバラはスコットランド南部に位置している。夏の最高気温は 19 度くらいだ。日本の蒸し暑い夏と違って涼しい。



僕は一昨日の夕方にエジンバラにやってきた。エジンバラ城があるのは旧市街。プリンシズストリートを挟ん

で反対側に広がるのが新市街だ。僕は新市街の外れにあるバックパッカー達が集まる安宿に泊まっていた。

昨日はエジンバラの旧市街を散策した。旧市街の東の端に位置するのがホリールードハウス宮殿。そこから旧市街の西の端に位置するスコットランド城までまっすぐに伸びているのがロイヤルマイルという名のメインストリートだ。岩山の頂に建つお城まで続くその道は軽い傾斜のついた上り坂になっている。通りにはカフェ、レストラン、パブ、みやげ屋、洋服屋。様々なショップが並んでいた。僕はその軽い上り坂をゆっくりと歩いた。このあたりは建物自体が古いのだろう。レンガなのだろうか、石積みなのだろうか。建物の壁はどこも浅黒くて、あちこちに黒ずんだ染みが見える。新しい雰囲気のある建物もあるが、回りの建物に合わせて、落ち着いた色をしていた。途中、セント・ジャイルズ大聖堂横の広場で、独りバグパイプの演奏をしている男性がいた。彼は青いチェックのキルトを腰に巻いた民族衣装姿。あたりにハイランドパイプの音色が鳴り響いている。スコットランドを訪れたらぜひ見たかったのが、このバグパイプの生演奏だった。その音色にしばらく聴き入ったあと、僕はまた通りを進んでいった。通りの道幅は城に近づくにつれ徐々に狭くなっていく。敵の侵入を防ぐ防衛上の理由だろう。やがて細くなった道が終わり、突然、大きな広場が目の前に現れる。ここは最初に敵を迎え撃つ場所だっ

たのだろう。さらにまっすぐ進むと城内へ進む門がある。そこから、エジンバラ城内へ入っていくことが出来る。幾つかの門を抜けると教会や王宮があった一角にたどり着いた。ぐるりと一回りして僕は、眼下を望める場所にたどり着いた。僕の泊まっている宿のある新市街が一望できる。新市街とはいっても 18 世紀に作られた趣ある街並で旧市街と一緒に世界遺産に登録されている場所だ。僕は眼下に広がる街並を見ながら旅の開放感に包まれていた。



翌日の午後、僕はプリンシズストリートガーデンのベンチに腰を下ろし、前日に見学したエジンバラ城を見上げていた。なんと大きな岩山だろう。そしてその上に建つ威厳に満ちた城。昨日見て歩いた旧市街が僕の前に大きな壁のようにそびえ立っていた。左側には岩山とお城が。右側にはそこへ続く旧市街の建物郡が丘の上に並んでいる。僕はその裾に広がるプリンシズストリートガーデンでたたずんでいた。時計をみるとまだ午後の 1 時くらい。僕はベンチから立ち上がった。ブルゾンを腰に巻いて、いつものようにむき出しのギターを小脇に抱えた。目の前の壁の向こう側へ行ってみようと思ったのだ。左に進んでいくと岩山の裾を通る小道があった。岩山の向こう側に回り込んで歩いていくと公園はそこで終わっていた。そしてキングス・ステーブルス・ロードという通

りに出た。さっきまでいたプリンシズストリートガーデンと岩山を挟んでちょうど反対側だ。さらに進んでいくとグラスマーケット。ここも古い町並みが広がる旧市街の一角。さまざまなお店が軒を連ねる。さらに歩いていくとヴィクトリアストリートに出た。この通りは上り坂になっていた。道幅は狭く、古い通りで小さなショップが軒を連ねる。そこに一件の本屋さんがあった。どうやら古本屋さんのような。中を覗き込んでいると、ドアが開いて店の中から若い女性が現れた。彼女はちょっと大きく厚みのある革製の茶色い手提げ鞆を持っていた。僕と目が合うと、「ハロー」と彼女は言った。僕の持っているギターを見て、一瞬、何か言いたそうだった。言葉の代わりににっこりと微笑んだ。そして、坂の上へと歩いていった。途中、振り返って僕を見た。実際のところ僕を見たのだろうか、それとも、ただ振り返っただけだったのだろうか。



本屋さんの店内には棚にぎっしりと古本が並んでいた。面白い本はないかなあ、そう思ってしばらく本棚を眺めていると、見たことのあるタイトルの本を見つけた。懐かしさもあって僕はその本を購入した。店の外に出るとそれをショルダーバッグに押し込んだ。背中に背負うリュックをいつも持ち歩くのは不便なので、アイルランドのダブリンで購入した安いショルダーバッグ。その中に

は小さな折りたたみの傘も入っていた。前日は雨が降りそうだったので、バッグに入れて持ち歩いていた。傘の他にも何か入っている。チョコレートだ。ハーシーズのアーモンドクランチチョコレートバーが二つ。お腹が空いたときのために入れておいたものだった。



本屋の前の坂道を登り突き当たりを左へ曲がると見たことのある風景だった。ロイヤルマイルだ。僕は昨日バグパイプの演奏を見た広場へと向かう。残念ながら、今日はバグパイプ奏者が見あたらない。あたりを見渡すと広場の一角で何かストリートパフォーマンスをしている女性がいた。なんだろう、そう思って近づいていくと、さっきの本屋さんですれちがった女性だった。マリオネット。そう、操り人形だ。ポータブルスピーカーから音楽を鳴らしながら、それに合わせてマリオネットを踊らせていた。赤い帽子を被った道化師のマリオネット。テンポのいいポップミュージックが聞こえていた。周りには数人が集まって見ている。僕も彼らに加わって一番後ろからマリオネットのダンスを見ていた。マリオネットはダンスの合間に、疲れた素振りを見せたり、座り込んで休んだり。本物のコメディアンのように振る舞っていた。動きが大げさなぶん、よけいにコミカルに見える。やがて、道化師が指さした。最初は何のことかわからずにいたが、僕を指さしているのだ。僕は一步前に足を進

める。道化師はまた僕を指さす。そして、『カモン』というジェスチャーをしてくる。僕はさらに前へ出る。すると、今度は道化師がギターを弾くまねを始めた。回りの人達はそのコミカルな動きを見て笑い出した。さらに道化師は『カモン』というジェスチャーをしてくる。僕はしかたなく道化師の横に並んでギターを弾く振りを始めた。また笑い声が上がり、いつの間に 10 人くらいの人が僕達を囲んでいた。僕は恥ずかしくて顔を上げることができなかったが、マリオネットは僕を突いてみたり、蹴るような動作をしたり、コミカルな動きを続ける。観客達はそのたびに、笑い声を上げていた。やがて音楽が終わり、マリオネットがうやうやしくお辞儀をした。僕も一緒になってお辞儀をした。すると軽い拍手がおこった。観客達が小銭をマリオネットの前に置かれたカゴの中に入れ始めた。そして僕達を囲む人垣が消えていった。僕はちょっとした緊張から解放されて、どっと冷や汗をかいてしまった。軽い放心状態でいると足元で何かを感じた。マリオネットの道化師が僕の足を突いていた。

「楽しかったな、相棒」と少し甲高い声の道化師が言った。僕はしゃがんでマリオネットと同じ目線になるように腰を下ろした。そして

「ああ、楽しかったな。突然のことで少し緊張したけどな」と言った。そして今度は彼女を見上げた。マリオネットを操っていた彼女はさっきと同じように僕ににっ

こりと微笑んだ。



僕達はロイヤルマイルの坂道を下っていた。あの後、同じようなパフォーマンスを二人でもう一度やってみた。また、観客が集まって、彼女はわずかなお金を稼ぐことができた。そして僕達は広場を後にした。ロイヤルマイルを途中で左に曲がると、すぐにノース橋にでた。エジンバラの中心に位置するウェイヴァリー駅の上に架かる橋だ。その橋を渡るとプリンシズストリート。

「ねえ、カルトンヒルって知ってる？」と彼女は訊いた。

「カルトンヒル？聞いたことないかも」

「静かでいいところよ。すぐそこだから。行って見ない？」

「うん、そうしょうか」

僕達はプリンシズストリートをプリンシズストリートガーデンのある方向とは反対方向に向かって歩き出した。少し歩くと小高い丘が見えてきた。そこがカルトンヒルだった。丘の入り口の狭い階段を登っていくと塔が見えた。ネルソン記念碑だ。丘の上に着くと、そこはシンプルな公園だった。一面芝生で覆われた丘の上にくつかの建物やモニュメントが建っていた。

「へえ、静かでいいところだね。ここへはよく来るの？」

「うん、何度かね。あなたはエジンバラへはいつから」

「今日で三日目」

「そうなんだ。三日目か」 そう言ってまた微笑んだ。

そして

「ねえ、こっちへ来てみて」 彼女はそう言って僕を案内した。

「ほら、あれが、さっきまで私達がいた旧市街よ。あれがエジンバラ城」 そう言って彼女は遠くを指さした。僕と同じくらいの背丈の彼女。僕はちらりと彼女の横顔を見た。濃いブラウンヘア。きりりとした眉とほお骨が印象的だ。ヤナは 27 歳。チェコから来ていたストリートパフォーマーだった。

「へえ、チェコから来たんだ。すごいね」

「すごい？」

「うん。すごい」

「どのへんがすごい？」

「なんとなく、すごい。うーん… なんとなく」 そう言って僕は笑った。

「ジュンはどこから来たの？」

「ダブリンから」

「アイルランドのダブリン？」

「そう」

「ふーん…」 そう言って彼女は僕の顔をじっと見ている。

「何？ どうしたの？」



「アイルランド人には見えないけど…」

「うん。日本人だよ」

「そう。日本人。日本から来たのね」

「そう、日本から」

僕はケルト文化に興味があること。ロンドン、リバプール、ダブリンと回ってきたこと。そしてエジンバラへはバグパイプ演奏を見にきたと彼女に説明した。

「もうバグパイプの演奏は聴いた？」

「うん。ヤナがいたあの広場でね。昨日、演奏している人を見かけたんだ。チェックのキルトを腰に巻いていたよ。ちょっと感激だね」

「そう、それはよかったわね。じゃあ、ジュンは来月のミリタリータトゥーを観にきたの？」

「ミリタリータトゥー？」

「知らなかった？ミリタリータトゥー。毎年8月にエジンバラ城で行われる一種のお祭りね。ライトアップされたエジンバラ城をバックにお城の前の広場で軍楽隊がパレードをするの。バグパイプの演奏ももちろんあるわよ。すごい迫力よ」

「へえ、詳しいんだね」

「一昨年の8月にエジンバラに来たのよ。今回で2度目の。前回来たときは5日間の短い旅行だったけどね」

「今回は長いの？」

「うん、1ヶ月はエジンバラにいる予定よ。ジュンは？」

「多分あと数日かな」

ヤナは一昨年、エジンバラに旅行で来ていた。当時チェコのプラハでIT企業に勤めていた。広報の仕事をしてたという。そのとき夏の休暇でエジンバラを訪れたのだ。

「ちょうどそのとき、エジンバラ・フェスティバル・FRINGEが行われていたの」

「エジンバラ・フェスティバル・FRINGE?」

「そう、エジンバラ・フェスティバル・FRINGE。毎年、夏にエジンバラ国際フェスティバルが行われるの。オペラ、演劇、クラシック音楽とかの芸術の祭典ね。同じ時期に行われるのがエジンバラ・フェスティバル・FRINGE。こっちはそんなに堅苦しくないの。街中のいたる所で演劇やアートパフォーマンスが行われるわ。コメディとかもあるわよ。ストリートは大道芸人達であふれかえるしね。すごい熱気とエネルギーよ」

「へえ、なんだかすごそうだね」

「ホントにすごいわよ」彼女は少し興奮気味だった。

彼女はそれ以来、自分自身がアナログなものに興味あることがわかったという。自分の働いている仕事がつくりこない感じはこれだったと感じたらしい。デジタル世界ではなく、アナログ世界のもの。手に触れて感じるもので、誰かを感動させる。そんな仕事をしてみたいと考えたのだった。それ以降、いろいろ考えてたどり着い

たのがマリオネット。チェコの伝統芸能としても有名な操り人形だった。

「独学で？」

「うん。自分独りで始めたの。この人形で3つめ。最初から道化師の人形よ。いろいろ探し歩いて、このジニーに出会ったのが1年前。それ以来ずっと一緒よ」

「名前があるの？」

「もちろん、あるわよ。私の大事な相棒だもの」

「彼はジニーっていうんだね」

「そう。ジニーよ。アラジンと魔法のランプに出てくるランプの精と同じ名前」

「やっぱり？ランプの精と同じ名前だって思ったよ」

「私の夢を叶えてくれるようにね。ジニーって名付けたの」

「じゃあ、ジニーと一緒にずっと旅をしているの？」

「いいえ。一緒に旅に出たのは今回が初めて」

「これまではどこでパフォーマンスを見せていたの？」

「チョコのプラハ城のふもとのカレル橋のあたりで」

「カレル橋？」

「チェコでは有名よ。露店やストリートパフォーマンスでプラハ観光では有名なところ。この橋を渡ってプラハ城を観に行く人が多いわ。そこで観光客相手に腕を磨いていたってわけ。

「へえ、そうなんだ。武者修行をしてたんだね」

「ムシャシュギョウ？」

「そう、武者修行。武者は日本語でサムライ。修行はトレーニング。昔、サムライが剣の技を磨くために、あちこちを旅しては、行く先々で強いサムライと戦ったんだ」

「サムライトレーニングか。面白いわね。今回はエンジンバラでサムライトレーニングね。がんばってお金を貯めてやっと、また2年ぶりにエンジンバラにやってきたんだから。いろいろと吸収していくつもりよ。他のストリートパフォーマー達から技を盗んでいかないとね」彼女の言葉には強い意志があふれていた。

ぶらぶらとカルトンヒルを歩いていると、僕達は神殿の柱のようなモニュメントの前に出た。

「これはなんだろう？」

「これはナショナルモニュメントっていうのよ。アテネのパルテノン神殿をまねて造られたんですって。でも資金不足で建設が途中で終わってしまったらしいわ」

「へえ、なんでも知ってるんだね」

「なんでもは大げさだけどね。でもいろいろ調べてきたわ。この2年間ずっとあこがれ続けてやっと来ることができたんですもの」

「そうかあ。エンジンバラに恋してるって感じだね」

「そうかも。エンジンバラに恋してるかも」

「ねえ、ヤナ。このあたりでちょっと座らない？」

「そうね」

そう言って僕達は芝生の斜面に腰を下ろした。

空はうっすらと雲がかかっていたが、暖かい日差しがカルトンヒルと僕達を包んでいた。

「ねえ、チョコレート食べる？」と僕は訊いた。

「チョコレート？」

「うん。これ」僕はそう言ってショルダーバッグからチョコレートバーを2本取り出した。

「ちょっとお腹がすいた感じ」

「だったら、これがあるわ」彼女はそう言って、鞆を開けた。そこにはさっきのマリオネットのジニーが入っていた。その横には茶色い紙袋。そしてそのとなりにはペットボトルが2本入っていた。紙袋をあけると小さいフランスパンとアルミホイルの包みが一つ。包みの中身はチーズだった。彼女はそのフランスパンを縦に真ん中から割ってチーズを挟み込んだ。そしてそれを半分にして、僕に手渡した。

「はい、これもね」そう言った後にペットボトルを一本僕に差し出した。

「これは？」

「紅茶よ。家を出る前に入れてきたの」

「ありがとう」

フランスパンは少しパサついていたが、チーズの塩味がきいていた。

「友達の家には居候だから節約しないとね」と顔をしかめてみせた。僕はチョコレートを一つ彼女に手渡す。それを彼女はおいしそうに食べ始めた。

「私、チョコレート大好きなの」そう言って今度は微笑んだ。

彼女はチェコで仕事をしているときにその仕事を通じて、あるスコットランド人と知り合い、友達になったという。その友達の招きで2年前の夏に初めてエジンバラを訪れたのだ。そのとき同様、今回もその友達の家泊めてもらっていた。ただし、今回は彼女にとっての武者修行。前回のような観光ではなく、また滞在期間も長い。だから切り詰めて節約をしているのだという。僕達はフランスパンとチーズ、そしてチョコレートを平らげた。

「ねえ、ヤナ。さっき本屋さんの入り口ですれ違ったのを覚えてる？」

「もちろん」

「僕ににっこりと微笑んだよね」

「うん。あなたギターを持っていたでしょ。だから私と同じ、エジンバラ・フェスティバル・フリンジにやってきたストリートパフォーマーかと思ったの。それでね」

「そうだったんだ」

「ジュンはおそこで何をしてたの？」

「うん。通りを歩いていたら、偶然本屋さんを見つけね。中を覗いていたんだ。最近、本を読んでいないな

あ、って思ってさ」

「それで何か面白い本は見つかった？」

「懐かしい本を見つけてね。これさ」そう言って僕はショルダーバッグから一冊の本を取り出した。

「ガリバー旅行記？ ジュンは小人の国に行きたいの？ たしかリリパットだったかしら」彼女はそう言って僕をからかった。

「そう、リリパット。でも僕が好きな話はラピュータの話さ」

「ラピュータ？」

「ガリバー旅行記ってリリパットの話が有名だけどね。僕が好きなのは空飛ぶ島『ラピュータ』の話なんだ」

「そんな話もあるの？」

「ガリバー旅行記はね、小人の国の話、巨人の国の話、空飛ぶ空中都市ラピュータの話、そして馬の国の話があるんだ。それから知ってる？ ガリバーは日本にもやってくるんだよ」

「ホントに？」

「ホントさ。ラピュータを去った後、ガリバーは日本にもやってくるんだよ」

「そうなんだ。知らなかったわ。それでジュンはそのラピュータのお話が一番すきなね」

「そうかもね」

他愛もない話をしばらくしていたが、やがて僕は芝生

の上で横になった。午後の暖かい日差しが心地よかった。  
気がつくと僕は眠りに落ちていた。



誰かの声がした。

「おい、ガリバー。起きろ、起きろ」

夢だろうか？僕はうっすらと目を開けたが、まだ、声は続いていた。

「おい、ガリバー。起きろ、起きろ」

ぼんやりとした視界の向こうに誰かの姿が見えた。僕のお腹の上で何かが動いていた。それは、マリオネットのジニーだった。僕のお腹の上でジニーはステップを踏んだり、踊ったりしていた。

「やあ、ジニー。どうしたんだ。気持ちよく昼寝をしてたのに」

するとジニーはさっきのように大きな身振り手振りで僕に言った。

「さあ、ムシャシュギョウに行くぜ。ロイヤルマイルが俺達を待ってるからな」そう言って僕のお腹の上で大きく飛び跳ねた。まるで僕のお腹がトランポリンのように。僕はゆっくりと上半身を起こした。

「おい、やめてくれよ、ジニー。さっきパンを食べたばかりなんだぜ」

僕は彼のように大きな身振り手振りでそう言った。そして僕は視線を上に移した。ジニーを操っていたヤナの



顔がそこにあった。

「さあ、行きましょう。ジュン」彼女はそう言ってにっこりと僕に微笑んだ。

「うん、行こう」僕はそう言って座ったままで大きく伸びをした。するとジニーも大きく伸びをした。その姿があまりにもおかしかったので僕は大笑いをした。彼女も一緒に大笑いをした。ジニーも甲高い声で大笑いをした。空を見上げるときれいな青空が広がって雲はどこにも見えなくなっていた。僕達の笑い声がエジンバラの空に響いていた。

## ♪ Amsterdam

僕はケルク通りとライゼ通りが交わる交差点に立っていた。僕の横を路面電車がゆっくりと通り過ぎてゆく。マルコは僕をハグして別れを惜しんでいた。大きな体、口とアゴのまわりに無精ヒゲを蓄えた丸顔。無造作に伸びた髪はカールして、大きく広がっていた。背中には大きなバックパックを背負っている。彼は一步下がって僕の顔をまじまじと見てこう言った。

「旅を楽しめよ、ジュン」

「マルコもな。また会おうぜ」

名残惜しそうに僕を見ていたが、「じゃあな」そう言って、僕に背を向けライゼ通りをアムステルダム中央駅方面に向かって歩き出した。10メートルほど歩いた後で振り返り「自転車には気をつけるよ、ジュン」そう言って大笑いをした。「マルコもな」そう言って僕も大笑いした。そしてマルコはまた僕に背を向け歩き出した。やがてその姿は小さくなり人の流れの中に消えていった。



その前日、僕はスコットランドのエジンバラ空港からオランダのスキポール空港へとやってきた。1時間半の短いフライトでヨーロッパ大陸への最初の一步を踏み出した。まずは空港からアムステルダム中央駅へ。すでに

午後3時を回っていた。駅を出ると目に飛び込んできたのはトラムと呼ばれる路面電車。それまで訪れた都市では見なかった光景。そういえば日本にいたときも僕的生活の中に路面電車はなかった。空を見上げるとアムステルダム of 青空と僕の間には路面電車のための電線が張り巡らされていた。3 輛編成の路面電車が僕の前を通り過ぎていく。僕は駅から正面にまっすぐ伸びているダムラック大通りを歩き出した。エンジンバラを出たときの曇り空とは違う明るい空模様。汗ばむほどではないが、爽やかな夏の日差しが僕の心を高揚させる。ダムラック大通りは人と熱気であふれていた。ホテル、レストラン、カフェ、ショップとなんでも揃っていた。この通りは王宮の前に広がるダム広場へと続くこの町のメインストリートだ。

しばらく歩くとダム広場が見えてきた。広場の左側には白い大きなモニュメント、右側に建つのが王宮だ。アムステルダムの中心部は五階建てほどの建物がほとんど。通りを歩いていても特に高いビルがあるわけでもなく、そうかと言って平屋の家があるわけでもない。同じくらいの背丈のビルが隣のビルにぴったりと並んで建っている。王宮は周辺の建物に比べ少し高さがあるくらいで、周りの景色に溶け込んでいるように思えた。人であふれる広場を抜けて進んでいく。いくつかの通りを越え、いくつかの角を曲がると、ライゼ通りという名の通りに出

た。広くはない通りだが、道の真ん中を路面電車の線路が通っている。時折、僕の脇を路面電車が通り過ぎていった。運河をいくつか越えるころには、あたりは落ち着いた雰囲気になっていった。

そろそろ、このあたりかな、と僕は呟いた。駅前から伸びるダムラック大通りや王宮近くにもホテルはあったが、どこも値段の高いホテルばかりだった。僕は街の中心部から離れるように歩いて、人の流れが静かになる場所を探していたのだ。このあたりまでくれば、バックパッカー向けの安い宿も見つかるだろう。僕はこれまでの旅の経験でそんなことを考えながら、ライゼ通りとケルク通りが交わる交差点に立っていた。ケルク通りへ曲がってあたりを散策すると、ちょうどよさそうなホテルを見つけることが出来た。ベッドにシャワー。それだけで十分だった。



翌朝、僕はホテルのレストランで朝食を食べていた。ベーコンとスクランブルエッグ、コーヒーとパン。それだけのシンプルなものだった。コーヒーをすすりながらぼんやりとしていると突然、目の前に大きな男が現れた。身長190センチはあるだろうか。右の肩には大きなバックパックを掛けている。カールした伸び放題の髪は大きく広がっていた。口とアゴの周りには無精髭が伸びていた。彼は何も言わずに大きなバックパックを床にどさり

と置いた。テーブルを挟んで目の前のイスに座ると、「おまえ、旅人だろ。どこから来たんだ」と言った。僕は、一瞬たじろいだが、「日本」と一言だけ答えた。彼は僕のその答えを聞いて満面の人懐っこい笑顔を見せた。

「日本からか。そうか、日本からか。俺はマルコ。ポルトガルのリスボンからやってきたんだ。よろしくな」

「僕はジュン。よろしく」そう言って笑顔を返した。彼はまるで 10 年来の親友との偶然の再会を喜ぶかのように、僕に話しを続けた。

「黄金の島、ジパングからやってきたのか。俺の名前のマルコはさ、マルコ・ポーロからきてるんだよ。マルコ・ポーロの東方見聞録を読んだお爺さんがな、マルコ・ポーロにあやかって付けたんだってさ。だから俺は生まれたときから旅人になる運命だったんだよ。おまえはその黄金の島、ジパングから来たってわけだな。どうりで気が合うわけだな」と彼は上機嫌に笑っていた。

「なるほど、面白い話だね。ところでどうして、僕が旅人だと思ったんだい」

「だって、ジュン。おまえがオランダ人ビジネスマンには見えないだろ。それにそいつ」そう言って、僕のとなりのイスに置いてあったギターに目をやった。「ギターを持って旅をしてるのか。なんかいいな、おまえ。俺もギター買おうかな。かっこいいよな」

「ギター弾けるのか」

「弾けない」

「じゃあ、だめだろ」

「俺は格好から入るタイプだからな。よし決めた。俺もギターを買うぞ」彼は大きな体を揺らしながら笑った。

「ジュンはいつまで、アムステルダムにいるんだ」

「どうしようかな。まだ決めてないんだ。とりあえず、このホテルには今夜も泊まるんだよ。昨日の午後、チェックインしたばかりで、まだ全然アムステルダムを観ていないんだ」

彼は数日間アムステルダムに滞在していたと言っていた。そして、これからデンマークに向かうと。僕達はレストランでの会話の後、一緒にホテルを出た。

「なあ、ジュン。俺、昨日、怖い目に遭ってさ」

「どうしたんだよ」

「自転車だよ、自転車。昨日、自転車にぶつかりそうになってな」

「自転車？」僕は思わず笑ってしまった。

「笑い事じゃないよ。こっちの自転車の数ったらすごいだろ。自転車専用レーンとかもあってさ。ビュンビュンくるんだよ。あぶなく自転車にひかれそうになったよ。ホント怖かったよ」

「確かに自転車多いよな。でも自転車なんてどこでも走ってるだろ」

「そりゃ、走ってるだろうけどさ。俺の住んでいるリ

スポンはそんなに自転車は多くないんだよ」

「へえ、そうなんだ」

「そうだよ、リスボンは坂の街だからさ。自転車に乗ってる人はそんなに多くないんだ。いやあ、ホントに昨日は怖い思いをしたよ」

大きな体の彼が、しきりに怖い思いをしたというのを聞きながら、僕は懸命に笑いをこらえていた。

僕達はケルク通りとライゼ通りが交わる交差点やってきた。マルコは僕をハグしたあと「旅を楽しめよ、ジュン」と言った。そして最後に「自転車には気をつけるよ、ジュン」と言って大笑いして去って行った。



僕は一人でケルク通りをぶらぶらと歩いた。この通りは路面電車も通らずに静かだ。細い通りは一方通行の車道を挟むように両側に歩道がある。そして家々が建ち並んでいる。静かな通りをしばらく進んでいくと、小さな運河に掛かる橋が見えてきた。深緑色の欄干には沢山の自転車が駐車してある。チェーンで欄干にくくりつけられていた。欄干の深緑色と同じようなダークカラーの自転車がほとんどだ。カラフルな色のものやお洒落なデザインのものはいくらもみられない。実用的な昔風の自転車ばかりが目につく。橋から見る運河の水の色も欄干と同じ深い緑色だった。運河の左右には街路樹が太陽の陽の光を浴びて輝いていた。橋を渡り、さらに進んでいくと、今度

は大きな運河が目の前に現れた。運河には白い跳ね橋が架かっている。有名なマヘレの跳ね橋だ。時折、跳ね橋は跳ね上がり、その下を船がゆっくりと進んでいく。跳ね橋が降りると、向こう側から自転車がやってくる。僕は跳ね橋の袂で、運河をゆっくりと航行する船を眺めていた。ふと手元のギターに目をやると、弦が大分傷んでいることに気づいた。新しい弦に変えないとなあ、と僕は呟いた。換えの弦はホテルにおいてきた荷物の中にあっただろう。その後も僕は足の向くまま、しばらく運河沿いを散策した。そしてまたホテルに向かって歩き出した。途中、有名なシングルの花市場を通る。花の球根、種、生花を扱う店が運河沿いに並んでいた。花屋さんの向かいにはおみやげ屋さんやカフェも並んでいる。おみやげ屋を覗くと、オランダの名産であるチーズや木靴、ポストカードが置かれてあった。また後でゆっくりと来てみたいな、そんなことを考えながら通り過ぎ、ホテルへと帰っていった。

ホテルのフロントには朝とは別の人が立っていた。朝は体のおおきな笑顔のおばさんだった。鍵を受け取ると、「行ってらっしゃい」と笑顔で見送ってくれた。今立っているのは僕より少し若い女性だ。「ただいま」と僕が笑顔を向けると、彼女は無表情のまま僕を見返した。部屋番号を伝えると、

「チェックアウトしたんだから、部屋に荷物を置いて



おかないで」そう言ってフロントの奥に入っていった。そして僕のリュックを持って戻ってきてフロントのカウンターの上に、どん、と置いた。

「今日も泊まるから、部屋に荷物を置いておいたんだけど」

「あなたは昨晚、一泊でしょ。勘違いしないで」とあいかわらずの無表情だった。僕は、「しまった」と思ったが顔には出さず、「今日も泊まりたいんだけど」と続けた。

「満室よ」と彼女は無愛想に短く答え、今度は目を合わせようとはしなかった。



腕時計を見ると午後1時を回っていた。僕はホテルの玄関の外に立っていた。足もとにはリュック、小脇にはギターを抱えていた。そして昨日の晩のことを思い出していた。僕は確かにチェックインのときは一泊と伝えていた。夜になってフロントに降りていくと小柄な愛想のよいお爺ちゃんがフロントでイスに座っていた。僕は

「明日の晩も泊まりたいんだけど。部屋の空きはありますか」と訊いた。彼は

「イエス、イエス」といって愛想よく笑った。僕が

「ノットオンリー、トゥナイト。バット、トゥーナイツ」今晚だけじゃなく、二晩だよ、と改めていうと彼はまた笑顔で

「イエス、イエス」と応えた。結局、彼には何も伝わっ

ていなかったのだ。彼が言った言葉は「イエス、イエス」  
わかった、わかった、という単語だけだったのだ。僕の  
詰めが甘かったのだ。しかし旅先でごねてもしょうがない。  
僕はあきらめて、そのホテルを後にした。今日の午後  
後はゆっくりと郊外の風車の村を観にいこうと思っていた  
のだが、予定変更だ。また、どこか宿を探さなくては。  
そう思って歩き出した



僕はとある家の前に立っていた。

「ここがレンブラントの住んでいた家か。光と影の魔  
術師と言われた画家だな」と僕は呟いた。絵画にとくに  
興味があるわけではなかったが、彼の名前は知っていた。  
その家はとりわけ特長がある家というわけではなかった。  
それまで見てきた他の家となんら変わりはない。1606  
年に建てられたという古いレンガ造りの建物。緑色の玄  
関ドアの前には数段ほどの階段がある。アムステルダム  
の他の家々と同様に間口は狭い。周辺の建物は新しい今  
時の建物に変わっていた。レンブラントの家だけが古い  
趣を残している。僕は少し離れて建物の全体の姿を見た  
くなった。道路の向こう側の歩道からじっくりと観てみ  
よう、そう思って振り返った瞬間だった。そしてそれは  
一瞬の出来事だった。



バーン、と音がした。後ずさりしながら振り返った僕

に、自転車が突っ込んできた。その自転車が悪いわけではない。歩道と車道の間は自転車専用レーンになっていたのだった。不注意に後ずさりをした僕は自転車専用レーンに飛び出してしまった。振り向きざまにギターのネックが走ってきた自転車にぶつかったのだった。僕は大きくよろけて、歩道に尻餅をついた。ギターは僕の手を離れ、地面に落ちた。その自転車はキーと音を立てて止まった。自転車を歩道の邪魔にならないところに置いて、乗っていた女性があわてて僕に駆けよってきた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫です。僕のほうこそ急に飛び出してすみませんでした。あなたこそ大丈夫ですか？」



僕達は小さな広場のベンチに腰掛けていた。レンブラントの家からすぐのところだ。運河に掛かる橋の上が広場になっていた。広場の真ん中にはオレンジ色の古いベスパカーが留まっている。移動ホットドック屋さんだった。車の四隅には緑、赤、黄色、シルバーの parasol が大きな花のように開いていた。ホットドックやドリンク、ソフトクリームも販売している。僕はソフトクリームを、彼女は紙コップに入ったコーラを飲んでいて、この小さなホットドック屋さんとは彼女は友達だった。

「友達の顔を見にきたらね、ホットドック用のパン買ってきてって、頼まれたのよ。それで買い出しに行った

帰りだったの。もうすぐだって思って油断しちゃったのよね。ジュン、本当に大丈夫？それにギターも心配だわ」

「大丈夫だよ。ギターも心配ないよ」

「だってギターの弦、切れてるじゃない」

「弦は古くなってたから交換しようと思ってたんだ。ギターは本当に大丈夫だよ」

「ホントに？」

「ホントに大丈夫。それよりソフィーは大丈夫？怪我とかしてない？自転車は大丈夫？」

「私はみてのとおり大丈夫。自転車は私以上に丈夫だから心配いらぬわ」と彼女は笑った。彼女の自転車は紺色。昔の新聞配達で使われていたようなシンプルで大きい自転車だった。明るいブロンドヘアの大柄な女性。はき込んだブルージーンズに白いTシャツ、足下にはペパーミントグリーンのシンプルなスニーカーを履いていた。僕はふと、マルコのことを思い出した。自転車には気をつけるよ、と言ったマルコの言葉を。あのときは人ごとだと思って軽く笑い飛ばしたが、今度は僕の番だった。マルコがこのことを知ったらきっと大笑いするだろう。僕は、マルコがあんな大きな体を縮ませて、怖かったと言ったときのことを思い出して、笑い出してしまった。すると彼女はちょっと怪訝そうな顔をして

「どうしたの？」と訊いた。僕はマルコとの出会いと彼の自転車の話をソフィーにしてあげた。

「確かに、オランダは自転車が多いからね。ビュンビュン飛ばす人もいるわよ。初めてアムステルダムに来た人はびっくりするみたいね。ジュンも気をつけてね」といって彼女は僕をからかうように笑った。

「ところでジュンは何してたの？アムステルダムにはレンブラントの家を観にきたの？」

僕は旅の途中で何となくアムステルダムに立ち寄ったこと。そしてホテルでのトラブルのことを彼女に話した。

「そう、それは大変だったわね。私、もしかしたら力になれるかもしれないわ」

彼女はアムステルダムの中心地から少し離れたフォンデル公園の先にある小さなアパートで独り暮らしをしていた。彼女の両親は街の中心部に住んでいた。一階は雑貨屋さん。二階と三階がホテル、そして四階が彼女の両親の住む部屋だった。彼女は両親を訪ねる際によくそのホテルに顔を出すという。ホテルのスタッフとも親しいと言った。

「私、フラワーアレンジメントの仕事をしているの。両親の家に行くときには自分でアレンジした花束をいつも持っていくのね。ついでに下の階のホテルにもいつもお花を持って行くのよ。だからホテルの人達とはお友達なの。部屋数の少ない小さなホテルだけど、とりあえずこれから行ってみない」

「ホントに？ありがとう。でも高いホテルには泊まれ

ないよ」

「大丈夫、私から頼んでみるから」

僕達はバスパカーのホットドック屋さんに手を振って挨拶をした。そしてその広場を後にした。彼女はすぐに近くの橋の欄干に大きな鍵をつけて自転車を留めた。

「自転車は置いて、歩いていきましょう」

「ずいぶんと大きな鍵だね」

「しっかりと鍵を掛けておかないとね。戻ってきたら、なくなってるかもしれないから」といって彼女は肩をすくめた。



人通りの多い表通りをしばらく歩いたあと、僕達は細い路地に入っていった。

「ソフィーの両親の家はこのあたり？」

「うん、もう少しだから」と彼女は僕を促した。

そこは、静かで落ち着いた場所だった。

「お待ちせ。ここがそうよ。二階がホテルのフロントだからね。先に行っててくれる。私は一階の雑貨屋さんに挨拶だけして、すぐに行くから」と彼女は一階のお店の中に消えていった。僕は一人で階段を上がっていった。狭く急な階段だった。二階に上ると左側にドアがある。そこがホテルの入り口だった。ドアを開けるとすぐにホテルのフロント。目の前には僕と同世代の人の良さそうな男性が白いポロシャツを着て立っていた。背が高い感

じのいいその彼は、僕を見つけるとにっこりと微笑んだ。

「いらっしゃいませ。宿泊の予約ですか」

「はい。あの、今日これからなんですけど…」と僕は答えた。彼は僕のその言葉を聞いて「すみません、満室なんです。今日は土曜日だから。せっかく来て頂いたのに」と申し訳なさそうに言った。ちょうどそのとき、ソフィーが階段を上ってきた。

「こんにちは」とソフィーは笑顔を見せ「彼はジュン。私の友達なの。今晚の宿を探してるっていうから連れてきたのよ」と言った。そして彼に何やら説明を始めた。オランダ語だから内容はわからなかった。僕はフロントの近くにある白いソファに座って部屋を見渡した。窓辺の小さなテーブルには水差しに入ったチューリップが飾られていた。色とりどりのチューリップが園芸用の真鍮の水差しの中にアレンジされ、窓辺の景色に彩りを添えていた。彼らは楽しそうにしばらく話しをしていたが、

「ジュン、大丈夫だって」とソフィーは僕に声を掛けてきた。フロントの彼も

「大変だったね。でも大丈夫だよ。今日はここに泊まればいいよ」と言ってくれた。

「満室じゃないのかい？」

「ジュンはソフィーの友達なんだろう。じゃあ、僕の友達でもあるわけだ。友達のためさ。なんとかするよ」といって爽やかな笑顔を僕に向けた。僕は早速、部屋の鍵

をもらい荷物を部屋に置いてきた。フロントに戻ると、

「ありがとう、ソフィー。ありがとう、ルーク」

「どういたしまして」と彼らは応えた。

「これからどうするの？」とソフィー。

「うん、適当にぶらぶらしてみるよ」

「わかった。アムステルダムを楽しんでね。私は上の階の両親に会いに行くから。行ってらっしゃい」

「本当にいろいろありがとう」僕はそう言って階段を下り始めた。

「ねえ、ジュン」と後ろからソフィーの声がした。振り返ると彼女が笑顔で僕を見ていた。

「くれぐれも自転車には気をつけてね」と彼女が意地悪っぽく言った。

僕は彼女に笑顔を返して大きく手を振った。



どこかに楽器屋さんはないだろうか、と思いながら僕はアムステルダムの街を歩いていた。僕の小脇には弦が一本切れたギター、ジーンズのポケットには換えの弦がワンセット入っていた。見たところ、ギターに問題はなさそうだった。ただ、予備の弦をもうワンセットほしいなと考えていた。なかなか楽器屋さんは見つからない。気がつくとき昨日降りたったアムステルダム中央駅が見えてきた。腕時計に目をやると、まだ午後の3時を回ったところだ。見上げるとまだ日は高い。夏の午後はまだまだ



だ長そうだ。僕はそのまま駅に向かい、電車に乗り込んだ。



コーフ・ザンディク駅はアムステルダム中央駅から二駅目のところだった。駅を出ると何もない道路脇だ。僕はしばらく歩いて大きな通りと交わる交差点を右に曲がった。そのまましばらく進むと大きな橋が見えてくる。橋の袂、右側には大きな風車が見えてきた。僕はそのまままっすぐ橋を渡る。橋の中ほどまでくると、橋の左川対岸に並ぶ風車が見えた。ザーンセ・スカンス。僕がアムステルダムで観たいと思っていた風車の村だ。橋を渡ると左側に風車の村が広がっていた。実際に人が住んでいるらしい。僕は村の中を散策した。村の中にも小さな運河がありそれぞれのエリアを結ぶかわいらしい木の橋が架かっている。村の中は緑色の板壁で屋根はオレンジ色や茶色の建物が多。一階建てや二階建ての家々。チーズや木靴の実演販売を行っているところもあった。昔のオランダの庶民の衣装を身にまとった人達も所々で見かける。当時にタイムスリップしたような場所だ。僕はひととおり村を散策した後で、川沿いの風車を見に行った。近くで見るとかなり大きい。川沿いの道を僕はのんびりと歩いた。昔はこの周辺に数百の風車があったらしい。今は数基のみが残っている。川沿いの道は二本走っていた。上の段は歩行者用。下の段をときおり自転車が

通っていく。僕は途中から風車を挟んで川と反対側に広がる牧草地の中へ進んでいった。草の背丈は芝生よりは少し長いくらいだった。僕は風車から適当に離れたあたりで振り返った。

「この辺かな」と呟いた。振り返ると風車が30メートルほど先に見えた。大きな4つの羽根を持つ古いその風車はゆっくりと回っていた。僕は草の上に腰を下ろした。ポケットからギターの弦を1セット取り出す。パッケージを開け、6本ある弦の一番細い弦を取り出した。そして切れた弦と交換した。ギターのペグを回して少しずつピッチを合わせていく。夏の夕暮れの風がやさしく顔を撫でていく。

「チャリーン、チャリーン」

ちょうどその時、自転車のベルが鳴った。反射的に顔を上げると、遠くで女性が手を振っていた。風車の下をとおる道。それは紺色のがっしりとした自転車にまたがった、ブロンドヘアの女性だった。

「ジュン、何してるの？」彼女は手を振りながら大声で僕を呼んだ。そして、途中の草原に自転車を横倒しにして、まっすぐに僕のところへ歩いてきた。

「ソフィーこそ何してるの？」

「私はよく、ここへ来るのよ。風車を観にね」

「自転車で？」

「中央駅からコーフ・ザンディク駅までは電車よ。」

自転車を持ってくるの」

「自転車を持ってくる？」

「そうよ。オランダの鉄道は自転車を乗せて移動出来るのよ」

「ソフィーは自転車が好きなんだね」

「風を感じて走るのが気持ちいいわね。今日みたいな夏の夕方とか、春の暖かい日はとくに気持ちいいわ。オランダはね、ほとんど平地だから自転車はどこへ行くにも便利なのよ」彼女はそう言って僕のとなりに座った。僕達はしばらく無言のまま、風車を眺めていた。いつの間にか風が弱まって、風車が止まった。

「風車が止まったね」

「そうね」と彼女は言った。そしてまた無言になった。僕達はぼんやりと動かなくなった風車を眺めていた。

「ふう」と彼女がふいに大きなため息をついた。しばらくするとまた大きく「ふう」という声が僕のとなりから聞こえた。どうしたのだろう、と思い彼女の横顔を覗いたが風にブロンドの髪が一筋、かすかに揺れているだけだった。僕はふたたびギターを手にした。そしてギターのペグを回しながら弦のピッチを少しずつ合わせていった。

「ねえ、ギターは本当に大丈夫？」

「うん、ほら、このとおり。弦を替えたら元通りだよ」と僕は彼女にギターを見せた。

「良かった。安心したわ」彼女はそう言って、僕に微笑んだ。しばらくするとまた、僕の隣からため息が聞こえた。

「ふう」

「ねえ、ソフィー。どうかしたの？」

「えっ、何で？」

「だって、さっきからずっとため息をついているよ」

「えっ、ホントに。やだ、私ったら」

「どうしたの。何か悩み事でもあるの？」

「うーん…」彼女はそう呟いたまま黙っていた。

「もしかして、恋煩い？」と僕は冗談っぽく訊いた。

「えー、やだ」と言って彼女は頬を赤らめた。僕はホテルでのルークと彼女のことを思い出していた。最初、彼女の雰囲気から、二人は付き合い始めの恋人同士なのかなと思った。でも様子を見てみると、そうでもなさそうだった。彼女がルークに気があるのかな、そんな印象だった。

「もしかして、相手はルーク？」

すると彼女はびっくりしたように僕を見た。

「えっ、何で。何でわかったの？」

「うん、何となく。そんな気がした」と僕は答えた。

彼は一年ほど前からあのホテルで働き始めたという。彼女は以前から、両親の元を訪れるたびにあのホテルにも顔を出していた。初めてルークを見たときから気にな

っていたという。そして、顔を合わせるたびに見せる彼の笑顔と軽快なジョークに魅了されていったのだ。

「気持ちは伝えていないの？」

「うん、だって、振られたらあそこに行きづらくなるじゃない。それは困るし。それに彼、私より年下なのよね。やっぱりだめかなあ」

「まだ、何も伝えてないんだね」

「うん」

「ランチとか誘ってみれば」

「うん…」 彼女はそう言って、またため息をついた。

「両親が食事を多めに作ったから、上の階で一緒に食べない、とかさ」

「いきなり、両親とじゃ、警戒するでしょ」

「そうかあ、そうかもね」 そう僕が言ったあと、二人はまた無言になった。

「ふう」とまた、彼女は大きなため息をついた。

「すごいため息だね。ほら、見てごらん。ソフィーのため息でまた風車が動きはじめたよ」

「えっ。もう、からかわないでよ。動いてないじゃない」

「からかってごめん。でもさっきからすごい大きなため息だよ」

「そんなに？」

「それだけ、大きなため息だと、空にいる恋のキュー

ピットが気づいてくれるかもね」

「ホントに？恋のキューピットが気づいたら、手助けしてくれるかな？」

「さあ、それはどうかな」

「ジュンったら、適当ね。また、私をからかったのね」

「ごめん、ごめん。でもきっと、もう恋のキューピットは気づいていると思うよ。きっと助けてくれるよ」と僕は言った。

「だといいいけどなあ」と彼女は力なく言った。

「ところでさ、ソフィー」

「何？」

「一緒に飲みに行かない？ホテルを紹介してくれたお礼もしたいし。僕がおごるよ」

「いいわね。でもおごらなくていいわよ。割り勘で」

「ルークも誘おうか。部屋を都合つけてくれたお礼も兼ねてさ。三人でお酒でも飲みに行こうよ」と僕は続けた。すると、

「ふーん…。なるほどねえ」と彼女は僕の顔を見た。そして

「腕のいい恋のキューピットならいいんだけどなあ」と言って笑顔になった。

僕はピッチの合わせ終わったギターをつま弾きはじめた。軽快なボサノバの曲だった。

「ねえ、それ、いい曲ね。何ていう曲」

「サマーサンバっていう曲さ」と僕は答えた。気がつくと夕暮れの青空をバックに風車がまたゆっくりと回り始めていた。

## ♪ Berlin

ベルリンの中心部にあるターミナル駅、ベルリン動物園駅に僕の乗った列車が着いたのはその日の午後のことだった。そこはその名前が示すとおり、すぐ近くにはベルリン動物園があった。駅を出て、動物園のほうへと歩いてみる。途中、ファーストフード店の前を通りかかると食欲をそそるいい匂いがした。



店内には美味しそうなハンバーガーの写真が飾ってあった。カウンターには二つのレジスターが並んでいて、それぞれに一人ずつ店員が立っている。カウンターの奥はハンバーガーやポテトを調理する厨房になっていた。カウンターの前には一列に注文待ちの客が並んでいる。彼らは空いたほうのレジへ順番に進んでいく。僕の前には4、5人が並んでいた。すぐに僕の後ろにも人が並んで7、8人ほどの列ができた。カウンターに立つ若いほうの女性はまだ大学生くらいだろうか。遠目にみても無愛想で笑顔ひとつ見せない。もう一つのレジには丸顔の太ったおばさんが立っていた。こちらは笑顔を浮かべ、楽しそうにそしてリズムカルにお客さんに対応していた。僕は、左手をジーンズのポケットに入れ、ユーロ硬貨の感触を手で感じながら、そのおばさんを見ていた。僕が



ここまで旅をしてきて得た教訓が一つあった。それは親切そうな人に話しかけること。道を訊くのも、お店で買い物をするにしてもそうだ。親切そうな人に話しかけると、だいたいはうまくいく。僕はそんなことを考えながら自分の番を待っていた。しかし、僕の目の前のカップルがそのおばさんのところに誘導され、僕は無愛想な娘のレジに進んだ。

ハンバーガーを注文しようとした僕は、ちょっと考えてコーラとフライドポテトをテイクアウトで注文した。支払いのために小銭をジーンズのポケットから取り出して、手の平の上で数えだした。背中にはリュック、右の脇の下にはギターを挟んでいるのでそれでなくても動きがぎこちない。そして自分の手の平の上で未だ見慣れていないユーロ硬貨と悪戦苦闘していた。本当はユーロ紙幣を出して、お釣りをもらえばいいだけのことなのだが、いつもそうやっているうちに、小銭が増えてしまったのだった。だから次の目的地に着く前に、ユーロ硬貨、特にセント硬貨を使い切ってしまったかった。次の目的地、スイスの通貨はスイスフランだったからだ。しかしすぐに目の前のその店員のいらだちの混じった大きなため息が聞こえた。ポテトとコーラだけを注文して小銭を出し数え始めた僕に、彼女はあきれていたのかもしれない。僕は顔を上げて笑ってその場を乗り切ろうとしたが、目の前のその店員は無愛想な顔を僕に向けたままだった。

カウンターを指でタップしていらだっている様子だ。すると、カウンターの奥から、別の女性が何事かと近づいてきた。年のころ 30 代半ばくらいだろうか。落ち着いた感じの女性だ。そして、若い女性店員に小声で何か言うと、僕に笑顔に向けた。彼女は僕の左の手の平の下に自分の左の手の平を添えた。そして、右手で小額のセント硬貨から順にピックアップしていった。そうこうしている間にさっきの若い娘がフライドポテトと紙コップに入ったコーラを持って戻ってきて、無愛想に僕の前のカウンターの上に置いた。そして奥へ行ってしまった。僕はといえば、左の手の平に残った小銭を乗せたまま、ぎこちなく突っ立ったままだった。彼女はコーラとフライドポテトを茶色い紙袋に入れて、その上の部分をクルクルと巻いて折りたたんだ。そして僕の突き出したままの左手を彼女は両手で包んで僕の指を折り返した。お代は頂いたわ。もう小銭をしまっていていいわよ、という彼女の合図だったのだろう。僕は我に返って、支払いが済んだことに気づいた。残った左手の小銭をジーンズのポケットに無理矢理押し込んで、その左手で彼女から紙袋を受け取った。彼女は相変わらずの落ち着いた笑顔で「ダンケシェ」と言った。僕も「ダンケシェ」とぎこちない笑顔を返した。振り返るとさっきより注文待ちの列は長くなっていた。僕はなんだかきまりが悪くて、下を向いたままその店を出た。



ベルリン動物園の入り口にはユニークな門が建っていた。お寺の門のようだ。面白いのは門の二本の支柱の下には象が立っていて、それを支えていることだ。つまり、門の左右の柱がそれぞれ一頭ずつの象の背中に乗っているのだ。色やディテールを見ると、やはり日本のものとは違っている。しばらく眺めた後、僕は振り返って通りの向こう側に渡った。そしてちょっと休める場所を探した。少し歩くと広場が見えた。広場には古い塔のような建物が建っていた。広場は至る所に街灯が建っている。そして街灯の足元は台座になっていた。僕はその一つに腰を下ろした。リュックを地面に置き、ギターをその上に置く。紙袋からコーラを取り出してストローを使って一気に吸い込んだ。炭酸が喉の奥を刺激する。このシューワとした感覚がたまらない。駅で手に入れた周辺地図を広げてみると、目の前の建物が教会跡だとわかった。以前はカイザー・ヴィルヘルム記念教会という名の教会の建物だったようだ。上部は大きく損傷しており、建物全体にすすけたような黒ずみがあった。

紙袋からフライドポテトを取り出して一気に平らげると、やっと気分も落ち着いた。これから夜までの時間をどうやって過ごすか、と僕は考えていた。僕がベルリン動物園駅に着いたのは午後の3時頃だった。今はまだ4時を過ぎたところだ。僕が乗る予定の列車の発車時刻

は夜10時頃だったはずだ。あと6時間はある。ゴミ箱を見つけてコーラのカップと紙袋をゴミ箱に捨てると、僕は広場を後にした。



ベルリン動物園駅の横を通り過ぎ、大通りの右側を進んでいく。ここはハルデンベルク通り。大きな街路樹が道の左右に配置されている。片側4車線の道路の中央には芝生が植えられた中央分離帯が走っている。通りの横に立つビルはどれもきれいで整然としていた。今まで訪れた街の風景とは違う。でもどこかで見たような景色。何だか東京に似ているな、と僕は思った。そのまましばらく歩くと別の大きな通りにぶつかる。そこは大きなロータリーになっていた。僕はそこを右に曲がって進んでいった。少し歩くと道の左右に緑が広がっていた。ジーンズのポケットから地図を取り出し、自分の場所を確認する。そこは大ティーアガルテンという名の公園だった。僕は道の右側の公園の中に入っていった。とてもきれいに整備されている公園で緑が生い茂り、まるで森のようだな、と僕は思った。しばらく進んでいくと水辺に出た。公園の中にある池だ。池の向こう側は水辺の際まで緑が生い茂っている。遠くには小さな手こぎボートが浮かんでいた。僕は水辺を後にして芝生に覆われた場所へ向かう。ちょうどよい木陰を見つけて、リュックとギターを置いた。そしてリュックを枕に僕は横になった。大きく

深呼吸すると木々と土の香りがした。僕は旅の途中で、いつもこうした気持ちのいい公園を見つけては芝生の上で横になるのを楽しみにしていた。僕にとっては見知らぬ土地で味わう贅沢の一つだ。



すごし離れたところで家族連れが遊んでいた。男の子が二人、ブーメランを投げて遊んでいる。ブーメランといってもへの字型をしたものではなく、Ω型をした丸みを帯びたブーメランだった。下の子は5歳くらいだろうか。うまく投げることができない。上の10歳くらいの子は、上手に投げていた。ブーメランは小さな弧をえがき、投げた子供のところに戻ってきた。そこにお父さんも加わった。お父さんはさらに上手だ。投げたブーメランを空中でキャッチしている。一つのブーメランをお父さんと子供二人が順番に投げていた。目を閉じると、彼らの笑い声が聞こえていた。しばらくしてふと目を開けると、さっきの家族連れにもう一人女性が加わっていた。その女性は8ミリカメラを持っている。旦那さんと子供達を撮影しているのだろう。若いお母さんだな、と僕はその様子を遠目で見ていた。また目をつぶり、木々の隙間から漏れてくる日差しのゆらめきを感じていた。いつしかうとうととしてしまったようだ。まだ、彼らの笑い声がぼんやりと遠くで聞こえていた。木漏れ日が何かに遮られて暗くなったように感じ僕は目を開けた。目の前

に現れたのは8ミリカメラだった。さっきの女性が8ミリカメラのファインダー越しに僕を覗いていた。

「ハイ」

先に声を掛けてきたのは彼女のほうだった。

「ハイ。君の持っているそれは8ミリカメラ？」と僕は応えた。

彼女ははずかしそうに、はにかんだだけだった。僕はカメラには詳しくはなかったが、目の前のカメラは年代物の高級品のように見えた。

「何か面白そうなものは撮れた？」

「若者がひとり、リュックを枕に木陰でうたた寝。その横には木に立てかけられたギター。何かこれから面白そうなことが起こりそうじゃない？」そう言って彼女はまた、8ミリカメラのファインダー越しに僕を覗いた。

「何も面白いことなんて起こらないよ。僕はうたた寝しているだけなんだから」



彼女の名前はエレナ。30歳の数学教師。立ったまま、座った僕を見下ろす彼女は明るいブルネットのショートカット。ラフな白シャツにベージュのパンツを履いていた。

「へえ、エレナは学校の先生をしてるんだ。でも今日は平日だよ。学校に行かなくてもいいの？」

「今は、生徒達は夏休みよ。もちろん私達教師は学生

みたいに長期の休みはないけれどね。今日はオフなのよ。ジュンはなぜ、ベルリンへ。ギターを持って一人旅？」

「そうさ、ギターを持って一人旅。さっきベルリンに着いたばかりでね。夜にはまたベルリン動物園駅からスイスのチューリッヒ行きの列車に乗るんだよ。乗り継ぎ待ちでちょっとだけのベルリン滞在なんだ」

「そうなんだ。じゃあ、ベルリンではまだどこにも行ってないの？」

「うん。もう少し公園で時間を潰して、その後、駅に戻ろうかなって思ってさ」

「何で？せっかくベルリンに来たっていうのに？」

「滞在数時間じゃどこにも行けないと思ってね」

「そう、わかったわ。じゃあ、私が夜までだけあなたのガールフレンドになってベルリンを案内してあげる。さあ、行きましょう？」

「さあ、行きましょうって言ったって。旦那さんと子供達はどうするのさ？」

「旦那さんと子供達？」

「うん。あそこでまだブーメランを投げて遊んでいるじゃない」

「何言ってるのよ。私はまだ独身よ。彼らは知らない人よ」

「えー。エレナの旦那さんと子供達じゃないの？」

「いいえ、違うわよ。あのブーメランの動きが面白い

から、ファインダー越しに覗いていただけよ。子供達もかわいらしかったしね。さあ、さあ。時間がないんですよ」

彼女はそう言って、僕の手を引っ張った。僕は立ち上がり、リュックを背負ってギターを小脇に抱えた。彼女はさっきの親子連れに手を振っていた。



「ねえ、何を撮っていたの？」

「撮ってないわよ。ファインダー越しに覗いていただけ」

「えっ、撮ってないの？」

「うん。だってこの古い8ミリカメラは壊れていて動かないもの。お爺ちゃんが昔、これで小さいころの私を撮っていたんだって。でも私はそれを見たことがないのよね」

「見せてもらえば？」

「お爺ちゃんはまだ亡くなってしまったのよ。フィルムもどこかにいっちゃったみたい」

「そうかあ、残念だね」

「うん」

「それで、形見の8ミリカメラを持ち歩いているの？」

「そんな大袈裟なことじゃないんだけど。ファインダー越しに見る世界って面白いのよ」

「そうなの？」



「例えば、さっきのブーメラン。カメラでブーメランを追うと背景には公園の木々や青空が見えるでしょう。のびのびと自由に空を飛ぶブーメランがね。逆にブーメランを投げる子供に視線を固定すると、ファインダーの視界の外にブーメランが飛び出して行って、またファインダーの中に戻ってくるのよ。同じ動きでも視点を変えれば、見え方も違ってくるわ。そこにドラマが生まれるのよね」

「そうか。なんだか、奥が深いね」

「そう、奥が深いよ。私ね、もうすぐビデオカメラを買おうかと思っているの。そうしたら、いろいろ面白いシーンを撮るつもりよ」と彼女は目を輝かせた。



僕達は公園を出て、さっき僕がひとりで歩いていた大通りに出た。まだずっと先まで道の左右には緑が広がっている。時計を見るともう夕方の6時になっていた。

「ねえ、あれが見える？」と彼女は前方を指さした。道の真ん中がロータリーになっていて、その真ん中に塔が立っていた。塔のてっぺんは何かが付いている。夕方の青空をバックに金色に光っていた。

「あれが戦勝記念塔。てっぺんで黄金に輝いているのが、勝利の女神ヴィクトリアよ」

「あの光っているのが女神？」

「そう。あの塔は私の好きな映画にも出てくるの。『ウ

『イングス オブ ディザイア』っていう映画。知ってる？」

「聞いたことないなあ」

「あの女神の肩の上にね。天使が座ってベルリンの街を見下ろしているのよ」

「天使が？」

「そう。でもその天使は見た目は普通のおじさんなの。スーツを着た中年のおじさん」

「おもしろそうな映画だね。今度、観てみようかな」

「昔の映画なの。素敵な映画よ」と彼女は憧れの眼差しをその塔に向けた。

「映画好きなの？」

「うん。でも観るだけじゃなく自分で映画を撮ってみたいわ。いつかね」

「すごいね。未来の映画監督？」

「そうよ。きっと面白い映画を撮るわよ」

「そのときは僕も役者として使ってくれる？」

「いいわよ。おじさんの天使としてならね」

「おじさんの天使でもいいよ」

僕がそう言うと彼女は立ち止まった。そして8ミリカメラを僕にむけてファインダーを覗き込んだ。

「そうね。天使だから、羽ばたいてみて。天使の羽のように両腕をゆっくりと羽ばたかせてみてよ」

「いやだよ。恥ずかしいよ」

「ほら、ギター持ってあげるから」そう言って強引

に僕のギターを取り上げた。

僕はしかたなく、その場で両腕をばたばたさせて羽ばたかせた。

「もっと動き回って」と彼女はファインダー越しに言った。

僕は回りを見て人がいないことを確かめた。そして動きまわりながら両腕をばたばたさせた。

「どう？いい感じ？」

しかし彼女は無言だ。

「ねえ、どう？」

「うーん…」

「ねえ、どうなの？」

すると彼女はにっこりと微笑んだ。

「不合格」

「えー？」

「オーディションは不合格だわ。だって慌てたガチョウみたいよ」と言うと今度は大笑いをした。

「えー、ガチョウみたい？」と僕も大笑いをした。

いつの間にか、僕達は戦勝記念塔のあるロータリーまでやってきていた。

「この道を右に曲がって進んでいってね。さらにまた右に曲がるとベルリン動物園に戻るのよ」

「そうなんだ。こっちの道からも公園に来れたんだね。僕はベルリン工科大学のほうから回ってきたんだ」

「ベルリン動物園の門からならどっちを回っても同じぐらいよ。ジュンが寝転んでいたあたりまでならね」

「ベルリン動物園の門って面白よね。あれどこの国の建築様式だろう？」

「あれって、日本風じゃないの？」

「ちょっと違うんだよね。似たようなのは日本のお寺の門でも見かけるけどさ。ベルリン動物園の門は象が門の下にいるだろう。あれは日本じゃないよね。インドとか東南アジアのスタイルだと思うんだけどね」

僕達が立ち話をしていると、男性が近づいて声を掛けてきた。モヒカン頭でパンクロックミュージシャン風の若者だ。僕は彼が何を言っているのかはまるでわからなかった。僕がギターを持っているから、それで声をかけてきたのかな、そう思った。エレナが何かを言うと若者は何事もなかったように黙って立ち去った。

「彼、何て言ってたの？」

「小銭はないかって」

「小銭？」

「そう。ここは観光客も来る場所だからね。そういう観光客に小銭を貸してくれっていう奴がいるのよね。さあ、行きましょう」

彼女の言葉にうながされてまた歩き出した。僕達は戦勝記念塔を越えてまたまっすぐに進んだ。大通りの両脇にはまだ公園が広がっている。

「さっきのベルリン動物園の門の話だけどね、日本の昔の銭湯でも入り口があんな感じのところは多かったよ」

「銭湯？」

「パブリックバス。みんなで入るお風呂だよ」

「スパみたいなのところ？」

「うん。でももっと日常的なところ。大きなバスタブにみんなで裸で入るんだ」

「水着を着けて？」

「ううん。水着は着けないよ。お風呂だからさ。みんな裸だよ」

「男も女も？」

「もちろん」

「やだ、はずかしいわよ」

「男湯と女湯は別々だから」

「なんだ、そうなんだ」

「どうしたの、がっかりした？」

「やめてよ。からかわないで」彼女はそう言って少しだけ頬を赤らめた。

「ドイツには裸で入るパブリックバスはないの？」

「スパは水着をつけるわよ。でも水着をつけなくて裸で入るスパもあるみたい。しかも混浴で。私は行ったことないけどね」

「ホントに？」

「知らないわよ。そういう所があるって聞いたことが

あるだけ」

「どこにあるの？ねえ、これからそこに行ってみる？」

「だから知らないわよ。まったく」そう言うと彼女の顔は真っ赤になった。しばらく歩いていくと今度は前方に大きな門が見えてきた。ちょうど門の手前で公園は終わっていた。

「あれは何？」

「あれはブランデンブルク門。あの門のこちら側に壁があったのよ。ベルリンの壁がね」

「覚えてる？壁のこと」

「うん、覚えているわよ。壁がなくなってからもう10年以上経つのね。今はここもベルリンの観光名所の一つだけれどね」

僕は彼女の横顔を見た。さっきまでとは違う彼女の表情に僕は少し困惑した。そして何か別の話題を頭の中で探していた。

「エレナはなぜ、数学の先生になったの？」

「うーん…。元々はチェスかな？」

「チェス？」

「そう。チェス。私のお母さん、チェスが好きでね。それで私も小さいころからチェスをやっていたの。倫理的に物事を考えるって面白いなって思ってね。それで数学が好きになったのかもね。日本にもジャパニーズチェスっていうのがあるんでしょ。チェスに似ているゲームが」

「あるよ。将棋っていうんだ」

「シヨウギ？」

「そう。シヨウギ」

「ジュンはシヨウギをするの？」

「ほとんどやったことがないよ。頭を使うゲームは苦手だし」

「なるほどね…。ジュンは混浴に入ることとか、そんなことばかり考えているからね」と彼女がからかうように言った。

ブランデンブルク門抜けてしばらく進んでいくと道が緩やかに左側にカーブしていた。

「ねえ、エレナ。あれは何？」僕は道の左側に立つ建物を指さした。

「あの、丸いみどりの帽子を被った建物はね、ベルリン大聖堂。教会よ。そして右側遠くに見えるのが、ベルリンテレビ塔」

「ミートボールに串が刺さっているような高い建物が？」

「おもしろいこと言うわね」と彼女は僕を見た。

僕達はベルリン大聖堂の前の広い芝生の上に腰を下ろした。陽が傾いてきて、大聖堂全体を琥珀色に照らしていた。

「結構、歩いたね」

「そうね。歩いたわね」

「帰りはベルリン動物園駅までまた歩くの？」

「うん。この先にアレキサンダー広場っていうところがあるわ。そこから電車に乗れば、あの駅まではすぐよ」

「そうなんだ。ちょっと安心した。また来た道を歩いて戻るのかと思ってさ」

「何時の列車？」

「夜10時頃だったはず」

「じゃあ、まだ時間はあるのね」

「うん。何か食べに行かない？お腹すいちゃったよ」

「だからテレビ塔がミートボールに見えたのね」

「そうかもね」

「お昼は何を食べたの？」

「動物園の近くのファーストフード店でフライドポテトとコーラを買ったよ」

「食べ物はフライドポテトだけ？」

「うん」

「ファーストフード店ならハンバーガーとかフライドチキンもあったんじゃない？」そう言うと、彼女は僕の顔をじっと見た。僕の身なりをあらためて観察しているようだった。

「もしかして貧乏旅行なの？」

「そうさ。貧乏旅行」僕はそう言ったあとで、さっきのファーストフード店での出来事を彼女に話した。彼女



は僕の話聞いて大笑いしていた。

「その店員さん達も私と同じこと思ったんじゃないかしら」

「きっとそうだと思うよ。実際は小銭を使い切りたかったんだけどね」

「さっきのモヒカン頭の彼に小銭を少し渡してもよかったかしら」

「確かにね。ポケットにまだセント硬貨がいっぱい入ってるからね」僕はそう言ってジーンズの左ポケットに手を入れて、じゃらじゃらと音を出してみせた。

「でもホントは違うんだよ。せっかくドイツに来たんだから、ドイツ自慢の美味しいソーセージをどこかでゆっくり味わいたかったんだ。美味しいビールと一緒にね」

「なんだ、そういうことか。じゃあ、今から食べに行きましょう。私のお薦めのレストランに連れて行ってあげるから」

「その後、駅まで送ってくれる？」

「もちろんよ。心配しないで」

僕は夕陽を浴びる彼女の横顔にふと目をやった。夕陽のせいかもしれない。彼女のブルーグレーの瞳がうっすらと緑がかって見えた。

「何？どうしたの？」と彼女は僕の視線に気づいて言った。

「うん。今は僕のガールフレンドなんだろ？」

「そうね。あと数時間だけね。でも変なことは期待しないでね」

「変なことって？」

すると彼女は立ち上がって8ミリカメラのファインダー越しに僕を覗いた。

「ちゃんとわかってるわよ。ジュンの考えていることはね」

僕も立ち上がった。そして、両腕を羽ばたかせておどけてみせた。

「あっ、慌ててる、慌ててる。やっぱり、慌てたガチョウね」そう言って彼女は笑った。

「きびしいなあ。グウア、グウア」僕もそう言って笑った。

「さあ、美味しいソーセージを食べにいきましょう」

「そうだね」

僕達はベルリン大聖堂を後にしてアレキサンダー広場のほうへ向かって歩き出した。

「ねえ、ちょっとギターを持ってて」

「うん、いいけど。どうしたの？」と彼女は不思議そうに僕を見た。

僕はギターを彼女に手渡すと、両腕を広げて深呼吸した。ベルリンの夕焼けを胸いっぱい吸い込んだ。そして両腕を胸の前で交差した。左の手の平で右肩を掴み、右の手の平で左肩を掴む。自分の肩を自分自身で抱きし

めるようにした僕を夕陽が後ろから照らしていた。

「ねえ、エレナ。見ててごらん」

僕はそう言って左右の手の平を広げて大きく伸ばした。

「あっ」とエレナが呟いた。

地面に映った僕のシルエットの左右の肩の所から、小さな翼が現れた。僕はその翼をゆっくりと羽ばたかせた。

「今度は合格ね」と彼女が呟いた。そして、

「ウィングス オブ ディザイア…。ジュン。あなたのディザイアは何？」と彼女は僕の耳元でささやいた。

二人の細長い影がベルリンの夕暮れにまっすぐに伸びていた。

## ♪ Zurich

長距離の寝台列車がチューリッヒ中央駅に着いた。イングランドから、アイルランド、スコットランド、オランダと旅をし、ドイツを経由してスイスに入る。列車を降りたとたんに、蒸し暑さを感じた。

チューリッヒでは旅行者向けの短期滞在フラットに宿を決めた。列車での長旅の疲れもあって、その日はのんびりと部屋で過ごす。



翌日も朝から蒸し暑い。午後になって、僕はギターを片手に、ふらりとチューリッヒ湖へと向かった。チューリッヒ湖へと流れるリマト川。この川を中心にして街が広がっている。川沿いのリマト通りを進んでいく。リマト川にかかるミュンスター橋を渡ると、目の前には聖母聖堂。そこから再び川沿いを下れば、すぐにチューリッヒ湖畔のビュルクリ広場が見えてきた。

ここからチューリッヒ湖めぐりの観光遊覧船が出ている。僕は広場を抜けて、まっすぐに遊覧船のチケット売り場へと向かった。そこにはドイツ語で書かれた遊覧船の案内があった。あたりを見渡したが、英語で書かれた案内は見当たらない。

僕はチケット売り場にいたスタッフの若い女性に英語

で話しかけた。彼女は何やらドイツ語で返してきたが、まるでわからない。僕は、「また明日、来るよ」と笑顔で応えた。彼女は明日「トゥモウロウ」という単語だけわかったようだった。

「トゥモウロウ バイ！」と笑顔で返してくれた。

さて、どうしようか。遊覧船はまた明日にしよう。駅のツーリストインフォメーションに行けば、英語で書かれたパンフレットがあるだろう。

僕はまた、リマト川沿いの来た道をぶらぶらと歩き始めた。

リマト川には小型のボートが沢山停泊してあった。川岸からボートまでは、栈橋が伸びている。その栈橋に座って読書をしている女性が一人。川面の少し緑がかった水の青。空の透き通るような青さ。彼女の白いワンピース。まるで一枚の美しい絵画を見ているようだった。

僕は彼女に近づいていった。

「ハイ」と声をかける。彼女はちらっとだけ僕を見たが無言。

「何を読んでいるの？」と訊いたがやはり無言のままだ。

僕は彼女から少し離れたところに腰を下ろした。そして彼女と同じように水面に足を下ろす。栈橋から水面までは少し距離があり、足は水面までは届かない。僕は、リマト川の向こうに広がるチューリッヒ湖の景色を見な

がら、足をぶらぶらさせた。

そのとき、軽いめまいを感じた。強い日差しのせいだろうか。僕は足をぶらんとさせたまま、上半身だけ横になる。そしておもいきり両手を広げた。陽の光はじりじりと眩しい。ポケットからバンダナを取り出し、顔を覆って目をつぶる。

どれくらい、そうしていただろう。僕は彼女の声で我に返った。

「日焼けするわよ。それにここはちょっと暑過ぎるわ」

僕の頭はまだボーとしていた。彼女の顔を見るが、逆光でその表情を読み取ることはできない。

「何か冷たいものでも飲みに行きましょう」と彼女は言った。

彼女は僕を、こじんまりとした静かで居心地の良いカフェへ、連れていってくれた。カウンターの中では、店のマスターがサイフォンでコーヒーをいれていた。僕は、彼女のお気に入りの窓辺のテーブルへ。

彼女の名前はラウラ。フリーのディスプレイデザイナーだ。ドイツ語とフランス語と英語を話すトライリンガル。ドイツ語とフランス語はネイティブ。英語は仕事をする上で必要だから話すようになったと言っていた。両親と妹の4人で暮らしている彼女は28歳になったばかり。

「以前はインテリアデザイン会社で働いていたの。フ

リーになってからは自由に使える時間が増えたわ。あなたは、何をしている人なの？」と彼女。

旅先で何度も訊かれるこの質問。

「雑誌の編集者だよ、旅行雑誌のね」と僕は答えた。

「へえ、面白そうな仕事ね。だから、旅をしているのね」彼女は僕の答えに納得したようだった。

僕は日本に戻ってからの自分のことを考えてみた。故郷の小さな街では旅行雑誌の編集の仕事はないだろう。いったい何をしようか？

二つのグラスが僕達の前に運ばれてきた。サイフォンで入れた濃いめのコーヒーで作った、ミルクたっぷりのアイスカフェオレ。

「僕が栈橋で声をかけたとき、無言だったね」と僕は彼女に訊いた。

「少し驚いたのよ。だってギターを持って近づいてきたから。歌を歌いだしたらどうしようと思って」

僕は彼女のその答えにおもわず、笑い出してしまった。

「そうかあ。驚かせちゃったね」

「ねえ、ギターはケースには入れないの？」

「うん。旅の最初の頃はね、布のギターケースに入れていたんだ。でも、それが面倒になってね。今はギターをそのまま持ち歩いているんだ」

「昔の吟遊詩人みたいね」そう言って彼女は笑った。

僕は彼女に遊覧船の話をした。英語の案内がなく、受

付の女性も英語が話せないので、あきらめて帰ってきたことを。

「それなら、明日、私と一緒に行きましょう。楽しみだわ。子供の頃に乗ったきりよ」と、彼女は言ってくれた。

しばらくして、僕達はカフェを後にした。外は少し涼しくなっていた。リマト川沿いをチューリッヒ湖に向かって歩く。風がとても気持ちいい。この通り沿いには観光客の姿が多く、みやげ物屋も多い。僕達は夕暮れの街を散策した。その後、彼女は僕をフラットまで送ってくれた。

僕は部屋に戻るとまた、軽いめまいを感じた。旅の疲れが出たのだろうか？その日はシャワーを浴び、早めにベッドに入った。



翌日も前日と同じように空は晴れ渡っていた。彼女は約束通り昼過ぎに僕を迎えにやってきた。手にはピクニックバスケットを持っている。僕の部屋はワンルームタイプのアパート。ベッドが二つ。テーブル一つとイスが二つ。小さなキッチンスペースとバスルーム。部屋の奥にはバルコニー。僕は彼女を部屋に招き入れた。そして、「ちょっとここで待ってて。すぐに着替えるから」と言ってバルコニーへと案内した。室内へ戻り服を着替え、ベッドに座って靴下を履いていると、また、めまいを感



じた。そして、そのままベッドに仰向けになってしまった。

彼女はバルコニーから僕に話しかけたが、僕は返事をする事が出来なかった。僕がベッドで横になっていることに気づいた彼女は部屋の中へ戻ってきた。そして

「大丈夫？どうしたの？」と心配そうに声を掛けた。

僕は「大丈夫、ちょっとだけ、めまいが…」と呟いた。言葉とは反対にめまいはひどくなっていった。



目を覚ますと彼女の姿があった。彼女はずっと、傍らに居てくれたようだ。部屋にあるイスに座って、読書をしていた。

「今、何時？」と僕は彼女に尋ねた。

「3時過ぎよ」

「夜の？」

「まだ、外が明るいでしょ」そう言って、彼女は心配そうに僕の顔を覗き込んだ。僕の頭は少し混乱していた。

「大丈夫？」

「うん、少し熱っぽい。風邪かな。たぶん、旅の疲れが出たんだと思う。もう1ヶ月くらい、ずっと旅をしているから」

そのとき、僕のおなかガグーと鳴った。彼女は、くすくすと笑った。

「今日は朝から何も食べてないから」と僕は、いいわ

けした。

「ねえ、サンドイッチ食べましょう。遊覧船で食べようと思って持ってきたの。冷たいハーブティーもあるわ」  
そう言って、彼女はバスケットを開いて見せてくれた。

僕達は、彼女の作ってくれたサンドイッチを二人で食べた。冷たいハーブティーが渴いた喉を潤す。

「今日はゆっくり休んだほうがよさそうね」

「そうだね。ごめんね。せっかく準備してきてくれたのに」

「いいのよ。そんなこと。それより、体調はどう？」

「うん、やっぱり風邪みたい」

「風邪薬は持ってるの？」

僕が風邪薬の持ち合わせがないことを告げると、彼女が持ってきてくれると言った。

「夕食も何か作ってきてあげるわ。何がいい？」

「ラウラが作ってきてくれるの？じゃあ、サンドイッチ」

「サンドイッチは今食べたでしょう。他には何がいい？」

「うーん…、やっぱりサンドイッチ。目玉焼きをほさんでいるサンドイッチがいい」

「目玉焼き？目玉焼きが好きなの？」

「うん。大好物なんだ」

「子供みたいね。わかったわ」そう言って、彼女は帰っていった。

僕はそのまま、すぐに眠ってしまった。

その日の夜、彼女はもう一度やってきた。風邪薬と目玉焼きをはさんだサンドイッチ、そしてミルクを持って。

「ちゃんと食べて、薬も飲んでね。明日の朝、また様子を見にくるわ」

「ありがとう、ラウラ」

「ゆっくり休んで。早く良くなってね、ジュン」そう言って彼女は帰っていった。



翌朝、ドアをノックする音で目が覚めた。彼女は前日と同じバスケットを持ってやってきた。そこには、野菜サラダ、ヨーグルト、ミルク、オレンジジュース、クロワッサン、チーズ、サーモンマリネが入っていた。

「ずいぶん沢山持ってきたね」

「このバスケット、沢山入るから」

僕達はバルコニーにイスとテーブルを出して、外を見ながら朝食を食べた。頭はすっきりしていたが、少し、身体のだるさが残っていた。

「ねえ、体調はどう？良くなった？」

「良くなったよ。昨日ラウラが持ってきてくれた薬が効いたみたい。まだ、少し、だるいけど」

「そうかあ。じゃあ、今日も部屋でおとなしくしていたほうがよさそうね」

僕は彼女の仕事のことが気になった。

「仕事は大丈夫？」

「今日は、午後、打ち合わせがあるわ。私、最近はショップのウィンドウディスプレイを手がけているの。夏のこの時期はね、そんなに忙しくないのよ。夏の終わり頃には、また、忙しくなるわ」

「へえ、そうなんだ」

「今の仕事のクライアントは、ほとんどが前に働いていた会社の繋がりなの。そこで、いい人達に出会えたから、今があるって感じかしら」

「そうかあ。いい人達に出会えたおかげかあ」僕は彼女を見て妙に納得した。

魅力的な人の回りには魅力的な人が集まるのだろう。彼女は、知的な雰囲気としぐさをそなえた女性だった。カフェでお店のマスターと会話するとき。コーヒーカップを持つ手つき。本を読んでいるときの横顔。僕はいつも彼女に見とれていた。

「ラウラの両親は何をしている人なの？」と僕は訊いた。

「父は金融関係で働いているわ。父方はフランス系だからお父さんはフランス語を話せるの。だから私もフランス語が話せるわ。お母さんは主婦よ。ねえ。ジュンの両親は何をしているの？」

僕は一瞬、口ごもった。あまり得意ではない話題。自分からこの話題を始めたことを、少し後悔した。

「父は出版会社の会社員。母は家にいるよ。僕は一人っ子なんだ」と嘘をついた。

「ラウラの妹さんは何をしているの？」僕はそう言って、自分の話題から彼女の話題へとすばやくかわした。

「妹はね。金融関係で働いているわ。きっと父の影響ね。いつも忙しそうよ」と彼女。

いつの間にか、時計の針は11時半をまわっていた。

「もうすぐ、昼だけど大丈夫？僕は少し横になるよ」

「うん、そうして。私は適当に帰るから」

彼女は僕を気づかってそう言った。

僕は心地よい満腹感と風邪薬のせいで、いつの間にか眠ってしまった。目を覚ますと彼女はイスに座っていた。

「あ、まだいたんだ」と僕は呟いた。僕は目を覚ましたとき、彼女の姿を見て、なぜかほっとした。時計を見ると午後の2時を過ぎていた。

「うん、心配だったから。どう？」

「うん、良くなった感じ」

薬が効いているのか、それとも彼女の持ってきてくれた食事のせいか。自分でもはっきりわかるほど、回復していた。

「そう、よかった。じゃあ、私、帰るね」

「えっ、帰っちゃうの？」

「うん。ジュン、もう大丈夫そうだから」

「そうかあ。帰っちゃうのか」

そのとき、僕はとても残念そうな表情をしたのだろう。彼女はちょっと困ったような顔をした。そして、携帯電話でどこかへ電話した。ドイツ語だったので、僕には、その内容はまるでわからなかった。彼女は僕を見てにつきりと微笑んだ。

「OK！ 今日是一緒にいてあげるわ」

僕は彼女のその言葉にほっとした。一人で旅を続けていて、僕は自分自身が少し遅くなったような気がしていた。しかし、見知らぬ土地で寝込んでしまい、心細くなっていたのかもしれない。そんなとき、優しい女性に出会って、僕はほっとしていた。そして、無意識に彼女にあまえていた。



僕は彼女にゲームをやろうと言った。それは簡単なゲームだ。

まず、僕が彼女に日本語で質問する。日本語のわからない彼女は僕の質問を推測してイエスかノーで答える。そのあと、僕は彼女に英語で質問の内容を教えてあげるのだ。

つぎは彼女の番。彼女はドイツ語で僕に質問をする。僕はイエスかノーで答える。もちろん、僕には彼女の質問はわからない。その後、彼女が質問の内容を僕に教えるのだ。

「面白そうね」と彼女は興味を示した。

僕達はベッドの上にあぐらを組んで向かい合って座った。

僕の最初の質問。

「この街は好き？」

少し考えて「イエス」と彼女は答えた。

「イエスなの？何て言ったか当ててみて」

「そうね。両親のことは好き？そんな質問じゃないかしら」

「うーん、ちょっと違うね。この街は好き？って訊いたんだ」

「それなら、やっぱりイエスね。とっても素敵な街よ。友人もいるし、大好きな両親とも暮らしているしね」と彼女は言った。

「じゃあ、私の質問ね」

彼女はドイツ語で少し長いフレーズを言った。僕はノーと答える。

「えー、ノーなの？私はイエスなんだけどな」

「何て言ったの」と僕。

「当ててみてよ」と彼女。

「うん。わかった。歌を歌うのは好き？って訊いたんじゃない？」

「歌を歌うのはきらいなの？ギターと一緒に旅しているのに？」

「きらいってわけじゃないけど。歌は歌わないよ。僕

はギターを爪弾くだけだから」

「じゃあ、弾き語りとかはしないの？」と彼女は意外そうな顔をした。

「うん、しないよ。ねえ、それでさっきの質問は何だったの、ラウラ？」

「さっきのはね。青空に浮かぶ白い雲は好き？って訊いたの」

「あっ、それならイエス。大好きだよ。クロワッサンみたいな雲ならもっといいかな」と僕は笑った。

「食いしん坊ね」そう言って彼女も笑った。

僕達はそんな調子で質問を出し合った。彼女はドイツ語で。僕は日本語で。あっという間に時間が過ぎていった。そして、二人の距離は少しずつ、近づいていった。

「じゃあ、今度は僕の番ね。あなたは、目玉焼きですか？」と僕。

彼女は少し考えて、「イエス」と言った。

「ねえ、何て訊いたの？」と彼女。

「知りたい？」と僕はじらすように訊き返した。

「あたりまえでしょ。早く教えてよ」

「うん。あなたは目玉焼きですか？って訊いたんだ」

「それなら、イエスよ。私も目玉焼きは好きよ」

「違う、違う。今の質問はね、あなたは目玉焼きですか？って訊いたんだよ」

「えー、そんな質問もありなの？ずるいわよ」



「ずるくないよ。ラウラは目玉焼きなんだね」と僕は笑った。

「もう、私は目玉焼きじゃないわよ」そう言って彼女も笑った。

「ねえ。もう一つ訊いてもいい？」

「えー、次は私の番じゃないの？」

「うん。そうなんだけど、もう一つだけ。後から、二つ連続で質問していいから」と僕は言った。

僕は彼女の目を見つめて訊いた。

「口づけしてもいい？」

彼女は、じっと僕の間を見て、質問の内容を探ろうとした。

「うん。わかった。たぶんイエスね」

「ぼんとに？」と僕は訊き返した。

「まさか、また変な質問なの？私は『目玉焼き』でも『ゆで卵』でもないわよ」

「今度は違うよ。でも答えはイエスなんだね」

「そうよ。イエスよ。ねえ、何て質問したの？」と彼女は僕を覗き込む。

僕は彼女の質問に答えるかわりに、彼女の目をまっすぐに見つめた。ゆっくり、彼女に顔を近づけていった。そして、口づけした。

彼女は少し驚いているようだったが、すぐに目を閉じた。すーと伸びた長いまつ毛。柔らかそうな栗色の髪。

僕はもう一度、ゆっくりと静かに彼女にキスをした。

その晩、彼女は僕の部屋に泊まっていった。



翌日、僕達はチューリッヒ湖のクルージングに出かけた。僕達は、ごく自然に手をつないでいた。それからの数日、彼女は僕をいろいろなところへ連れて行ってくれた。スイス国立博物館、チューリッヒ美術館、大聖堂、リンデンホフの丘。

あるとき、彼女は僕を本屋さんへ連れていってくれた。

それは坂の途中にある小さな本屋さん。店の前にはセール中の本が並べてあった。ディスプレイデザイナーの彼女は、アイディアを探しに、よくこの本屋さんに来ると言った。

僕は、カラフルな表紙の本のページをめくる彼女の知的な横顔、そして白いワンピースが眩しかった。

「いつも白いワンピースを着ているんだね」と僕は彼女に訊いた。

「夏はね。白系のワンピースが好き」

「いくつも持っているの？」

「うん。沢山あるわ。ロングやショート。真っ白やライトイエロー。花柄とかね。かわいいのがあると、つい買っちゃうの」

「仕事のときは？」

「仕事のときはパンツ姿が多いわ。動きやすいし。汚

れてもいいようにね」と彼女は言った。

僕と会うとき、彼女はいつも白いワンピースを着ていた。最初の出会いからずっとだ。しかし、一度として同じものを着ていることはなかった。僕はそれに気づいていた。僕は水辺で彼女を初めて見たときから、心を奪われていたのかもしれない。



チューリッヒ最後の夜、彼女は僕の部屋に泊まっていた。その夜の彼女は無口だった。僕はベッドの上でギターを爪弾いていた。彼女は僕に寄り添って目を閉じていた。眠っているのか。それともギターの音色に耳を傾けているのか。僕は指先に思いを込めて、ゆっくりとメロディを奏でた。それは静かな夜だった。

最後の日の朝、僕は部屋を片付けていた。冷蔵庫にあった、飲みかけの牛乳は捨てた。バスルームを見ると、彼女の持ってきてくれたラベンダーの香りの石鹸が置いたままだった。バルコニーに出してあったイスは部屋にしまいこんだ。バルコニーから下を見ると、スーツ姿のビジネスマンが急ぎ足で通りを歩いて行った。

僕達は一緒にフラットを出た。近くのカフェで彼女と軽い朝食を食べる。彼女はコーヒーと野菜サンドイッチ。僕はコーヒーとクロワッサン。そして目玉焼き。運ばれてきた目玉焼きを見て、彼女は、くすっと笑った。僕もつられて笑った。朝食を食べ終わってからも、彼女は無

口だった。

「部屋の鍵を返してくるから待ってて」と僕は彼女に言った。

「うん」彼女は軽くうなずいた。

僕は部屋を紹介してくれた宿泊案内所に向かった。

カウンターにいたのは年配の女性と若い女性。年配の女性が僕に訊いた。

「チューリッヒは楽しかったですか？」

「ええ、とっても楽しかったです。ぜひ、また訪れたいです」と僕は答えた。

「そうですか。それはよかったですね。ぜひ、またいらしてくださいね」

そう言って笑顔でドアの外まで来て、僕を見送ってくれた。

僕はその帰りに、おみやげ屋さんで小さな青い貝の付いたペンダントを買った。そして、自分の首につけた。

カフェに戻ると、彼女は一人、窓の外を見ていた。僕に気づくと

「今日は少し涼しいわね。明日からは、天気が崩れるらしいわ。ジュンがいた一週間はずっと晴れて暑かったのにね」と呟いた。

僕は彼女に初めて会った、あの暑い日のことを思い出していた。なぜか、ずっと昔のことのような気がしていた。

「そうだったね」と僕はうなずいた。

彼女は僕と目を合わせずに、ずっと窓の外を見ていた。

「ねえ。これ、きれいじゃない？」

そう言って僕は自分の首にかかっていた小さな貝のペンダントを指さした。

「あっ、ホント。かわいいペンダントね。どうしたの？」

「うん。ついさっき、おみやげ屋さんで買ったんだ」

そう言って、僕は自分の首からペンダントをはずした。そして彼女の手のひらにそっと青い貝を置いた。

「ラウラ。君へのプレゼントだよ」

「ホントに！うれしい」そう言って彼女は笑顔になった。

「僕はこれから、イタリア、スペイン、ポルトガルを回って、フランスに行くつもりなんだ。最後の目的地はパリ」

彼女は僕を見たまま無言だった。

「誰か、フランス語を話せる人はいないかなあ。パリはあまり英語が通じないって言うし。白いワンピースの似合う素敵な娘と一緒にいたら、パリも楽しいだろうなあ」と僕は続けた。

彼女は僕の言っている意味を理解したようだ。

そして、にっこり微笑んだ。笑うと彼女の目はいっそう大きくなる。

「ホントに。うれしいわ。パリでまた、ジュンに会え

るのね。それにね、私、ずっとパリに行ってみたかったの。お父さんからパリの話をよく聞いていたし。きっと楽しいでしょうねえ」彼女は少し興奮していた。

僕はペンダントを彼女の手のひらから取って、彼女の首につけてあげた。そして、首すじにかかるくキスをした。ラベンダーのいい香りがした。



彼女は僕をチューリッヒ中央駅まで見送りにきてくれた。

僕はヴェネチア行きの列車に乗り込んだ。窓を開け、彼女に手を振る。彼女は首にかけたペンダントの青い貝に手を当てて、僕に微笑んだ。そして、手を振った。発車時刻になって、列車がゆっくりと動き始める。彼女はずっと手を振っていた。やがて彼女の姿は見えなくなった。

目を閉じると、かすかにラベンダーの香りがした。

## ♪ Venice

リベルタ橋はイタリア本土からアドリア海に向かってまっすぐに伸びていた。その上を列車は進んでゆく。そしてその先に見える島がアドリア海の女王、ヴェネチアだ。

列車は昼過ぎにサンタ・ルチア駅へ到着した。ここが終着駅。駅に着くとまっすぐに駅構内の宿泊案内所へ向かう。そこで紹介されたホテルはサン・マルコ広場のすぐ近く。ヴェネチア島内は、運河を走る水上バス、水上タクシー、ゴンドラ、そして徒歩が移動手段。僕は手渡された地図を片手に駅を出た。



目の前にある大きな運河がカナル・グランデ。ヴェネチア本島の中心部をS字に通っている。ここから水上バスでサン・マルコ広場まで行くことができる。水辺の景色を楽しみながら水上バスでサン・マルコ広場まで行こうか。でも、旅の醍醐味は街歩き。地図を片手に路地を散策しながらサン・マルコ広場へと向かおう、そう思って僕はカナル・グランデに架かるスカルツィ橋を渡った。

細い路地を進んでいく。観光客向けのショップも多いが、床屋さんや生活雑貨のお店もある。観光地ではあるが、そこに住んでいる人達の生活の息吹を感じる。見る

もの全てが新鮮で面白い。あまりに周りの景色に夢中になってしまったからだろう。僕は地図を見ながら歩いていたが、すぐに自分の位置を見失ってしまった。そしていつのまにか、静かな路地を歩いていた。人がすれ違うのがやっとの道幅。左右には古い石造りの建物の壁。路地を抜けると今度は細い水路にぶつかる。方角的には左だろう。しかし、水路沿いの歩道は右側にしか伸びていない。さらにその先には水路に架かる橋。いったいどこへ続いているのだろう。水路の左側から黒いゴンドラがゆっくりとやってきた。静かに僕の目の前を通り過ぎてゆく。ゴンドラを操るのはゴンドリエーレ。白黒のボーダーシャツに黒いパンツ。そして頭には麦わら帽。客の乗っていないそのゴンドラは、ゆっくりと橋の下を抜けていった。のどかな風景だ。

「さあ、がんばってホテルまで行くぞ」僕はそう呟いた。地図を小さく折りたたんで、ジーンズのポケットにしまい込む。そして自分の感を頼りにまた、歩き始めた。

しばらくすると突然、小さな広場に出た。青空で日差しが眩しい。さっきまで陽の差し込まない細い路地を歩いていたので、目が明るさについていけない。地元の人だろう。老人が二人、イスに座って話しをしていた。その向こうは水路で行き止まり。僕は来た道へ折り返す。そんなことの繰り返し。迷路の中で僕は行ったり来たり。それでも、自分の方向感覚を信じて進んでいく。



やがて人のざわめきを感じ、無意識にその方向へ進むと、そこはリアルト橋。人気の観光スポットだ。僕の方向感覚は間違っていなかった。サン・マルコ広場はもうすぐのはずだ。少しほっとした僕。さっきまでの静かな路地とは違い、ここは人であふれていた。僕は道端でリュックを下ろし、ペットボトルの水を飲む。T シャツの背中汗でびしょりと濡れていた。

人のあふれる路地を抜けると目の前に大きなピアッツァが広がった。ここがサン・マルコ広場だ。広場を抜けると目の前に広がるサン・マルコ運河。岸には沢山のゴンドラが停泊してある。運河沿いのスキアヴォーニ海岸通りから路地に入ってく。目的のホテルはすぐに見つかった。それはこじんまりとした三階建てのホテル。チェックインを済ませ、部屋へと向かう。アサインされたのは二階の部屋。二階の小さなロビーには大きな窓、そして大きな赤いソファが置いてある。人の姿はない。



僕は部屋に入って、赤いベッドカバーに覆われたベッドに腰を下ろした。小さな窓が一つ。窓を開けるとそこからは入りくんだ路地の一部が見えるだけ。部屋の中はとても静かだ。となりの部屋だろうか。窓の外から女性同士がイタリア語で会話する声が聞こえていた。

部屋にバスルームはない。バスルームは共同だ。ベッドの上にタオルが2枚と石鹸が置いてある。部屋の隅に

は小さな洗面台。さっそく、共同のバスルームでシャワーを浴びてリフレッシュ。

部屋に戻ると、イタリア語は聞こえなくなっていた。僕は、ベッドの上でガイドマップを広げた。外国の地図は面白い。日本語のガイドブックにある地図とは雰囲気が違う。書かれている文字が外国語という違いだけではない。色使いや雰囲気が違うのだ。これまでの旅では、どの街でも、地図を見て歩けば、ほとんど道に迷うことはなかった。でもヴェネチアは違った。まるで迷路の中の冒険のようだ。



お腹も空いたことだし、何か食べにいこう、僕はそう思い立ち上がった。ギターを小脇に抱え、部屋を出て一階へ降りていく。フロントの横には運河の写真が掛けてあった。カナル・グランデだ。まるで別世界のようなヴェネチアの風景。

「ボンジョルノ」

いつのまにか僕のとなりに背の高い女性が立っていた。僕と目が合う。

「ボンジョルノ」と僕は応えた。

「ハロー」と青い目のその彼女は言った。20代後半だろうか。ブロンドのショートヘア。

「ハロー」と僕。

「ニイハオ」 彼女は僕を探るように言った。

「日本から来たんだ。中国じゃないよ」と僕はにっこりしながら英語で応えた。

彼女は納得したような顔をして微笑んだ。そして、「何号室」と訊いた。

「203」と僕が答えると、

「203 ね。じゃあね、ギターボーイ」と言って、足早に二階へ上がっていった。いったい何だったのだろう。ホテルのスタッフかな。僕は、そのちょっと面白い体験の後、ホテルを出てサン・マルコ広場へ向かった。



広いサン・マルコ広場はサン・マルコ寺院の前に広がっている。そして回廊のある建物が四角い広場を囲んでいる。人のあふれる広場を抜け、路地へと入っていく。おみやげ屋さんやレストランが並んでいた。僕は小さなカフェでパニーニをほうばった。カフェを後にし、人の流れにのって道を進んでいくと、先ほどのリアルト橋にさしかかる。ここからの眺めはすばらしい。カナル・グランデを水上バス、水上タクシー、ゴンドラが行きかっていた。運河の左右には古い建物が建ち並んでいる。ヴェネチアはゆっくりと楽しもう、僕はそう思って橋を降り、来た道を引き返した。

部屋に戻ると、僕はまた、ベッドの上でガイドマップを広げた。明日はどこへ行こうか、そんなことを考えながら、地図に印をつける。計画を立てるのも旅の楽しみ

の一つだ。

あっ、Tシャツを洗わなきゃ、と僕は呟いた。洗って乾かさないと明日の着替えがなくなってしまう。僕は、部屋の小さな洗面台に水をため、Tシャツと肌着を石鹸で洗い始めた。旅の間中、毎日この作業を繰り返していた。着替えは1セットだけ。荷物は少なく身軽なほうが旅は楽しい。ぎゅっと絞ったTシャツを窓辺にハンガーで掛ける。

ちょうどそのとき、部屋をノックする音がした。誰だろう？僕はそう思ってドアを開けた。そこには知らない女性が一人立っていた。小柄なアジア人。

「ボンジョルノ」と彼女は言った。

「ボンジョルノ」と僕。

「ハロー」と彼女は続けた。

「ハロー」と僕は彼女につられて言った。

「こんにちは、ギターボーイ」今度は日本語で彼女は言った。

僕はにっこりと微笑んで、「こんにちは」と言った。彼女もにっこりと微笑んだ。そして黙って僕を見ていた。僕は微笑んだまま、彼女の次の言葉を待っていた。

「さっきの背の高いドイツ人ね。彼女はバネッサ。私の友達なの」と英語で話し始めた。

「へえ、彼女、ドイツ人なんだ。君は？」

「私は香港出身よ」

「へえ、香港から」そう言って、僕はまた、彼女の次の言葉を待った。

「彼女がね、となりの部屋に日本人が泊まっているって教えてくれたの。だから、どんな人かなって思って来てみたの。迷惑だった？」

「全然、迷惑じゃないよ。むしろ大歓迎」

「入る？」僕はそう言って、ドアを大きく開いた。彼女は外から部屋の様子をちらっと見た。狭い部屋の中にベッドと洗面台。ベッドの上はギターと荷物で散らかっていた。窓辺にはTシャツが干してある。

「うーん。外のソファでどうかしら」と彼女は言った。

「そうだよね。部屋の中、散らかってるし」僕はあわててドアを閉め、部屋の外に出た。そして一緒に大きな赤いソファに座った。

彼女の名前はステラ。香港から来た 23 歳。大学を卒業して、秋からは就職すると言った。友達のバネッサとは、語学スクールで知り合った。ローマで 3 週間のイタリア語コースに通っていた彼女達は、帰国前にヴェネチアに立ち寄った。

「ヴェネチアにはいつまでいるの」と僕。

「明日まで。あなたは？」

「僕は今日、ヴェネチアに着いたんだ。2、3日はいると思うよ」

「私は 3 日間滞在したわ。町全体が迷路みたいね」

「そうそう。僕もサンタ・ルチア駅からここに来るまで、大変だったよ」

「そうですね。私達もよ。ねえ、知ってる？美術館とかもいろいろあるのよ。芸術祭もやってたわ。でも探し出すのは大変。まるで迷路の中の宝探しみたい。だから楽しいんだけどね」と彼女は微笑んだ。

ステラは香港へ、バネッサはドイツへ明日、帰国すると言っていた。彼女達は観光だけではなく、覚えたてのイタリア語を使いたくてやってきたという。

「バネッサはね。誰彼かまわず声を掛けているのよ。それが語学上達の秘訣だって言ってね。あなたにも声を掛けたでしょ」

「そうなんだよ。ボンジョルノ、ハロー、ニイハオってね。だからホテルのスタッフかと思ったんだ」

「それ面白い。バネッサに後で言うておくわ。さっき、また一人で出ていったわ。今頃また、誰かに話しかけているわよ」

「ところで、なんで日本人と話したいって思ったの？僕はイタリア語はわからないよ」

すると、彼女は手に持っている一冊の本を僕に差し出した。それは日本語の絵本だった。ほとんどひらがなで書かれてあり、キーワードとなる単語が太字で印刷されている。20ページほどの本で、かわいい挿絵が描いていた。

「へえ、日本語だね。どうしたの」

「うん、日本語覚えたいなあって思ってね。私、秋からはツアーコンダクターの仕事をするの。香港には日本からも沢山やってくるから。それにいつかは日本に行ってみたいの」

「へえ、すごいね」と僕は感心した。

「ねえ、この本読んで聞かせて」

「うん、いいよ」そう言って、僕は彼女にその絵本を英訳して読んで聞かせてあげた。

本の中では主人公の猫が登場する。彼はあちこちを旅し、その先々で空の星を磨いていくのだ。彼はロープをカウボーイのように星空に投げる。そして、星を引っ掛けて、手元に引き寄せる。彼はその星を、手のひらの上でハンカチを使ってきれいに磨くのだ。丸い星、四角や三角の星。大きい星や小さい星といろいろある。そしてまた、ロープで星空に投げ返す。星は夜空で、いっそう明るくなって輝くのだ。彼はそうやって、街から街へ旅をしながら、夜空の明るさを取り戻していくというストーリーだ。

「とってもかわいいお話ね。すごく気に入ったわ」と彼女は満面の笑みで僕を見た。

「ねえ、これはどういう意味」そう言って彼女は太字の単語を指さした。

「これはね、ゆめ。ドリームって意味だよ」と僕は答

えた。

「ゆめ」

「そう、ゆめ」

「ゆめはドリームね」と彼女。

「そう。ゆめはドリーム」と僕。

「これは？」と彼女は続けた。

「これはね、よぞら。ナイトスカイっていう意味だよ」

「よぞらはナイトスカイね」と彼女は真剣な眼差しで本を見ていた。

「これは？」

「ねこ。ねこはキャットだよ」

こうして僕達の時間は過ぎていった。いつの間にか窓からはオレンジ色の夕陽が差し込んでいた。

「あっという間に時間が過ぎちゃったわね。楽しかったわ」と彼女は言った。

「そうだね。あっという間だね。どうしようか？ちょっと外を歩いてみる？」

「そうね、ちょっと外に出てみましょう」

僕達はホテルを後にし、スキアヴォーニ海岸通りに出た。サン・マルク広場の鐘楼が夕暮れの空に突き出していた。

「きれいな夕焼けね」と彼女は言った。

「そうだね」と僕。

僕達は通りをまっすぐに進み右に曲がってサン・マル



コ広場へと入っていった。薄暗くなり始めた広場は相変わらず、人であふれていた。

「ねえ、サン・マルコ寺院は見学した？」

「まだだよ」

「ゴンドラにはもう乗った？」

「ゴンドラもまだだよ。だってさっき着いたばかりだからね」

「そうだったわね。明日から冒険の始まりね」そう言って、彼女は微笑んだ。

僕達はサン・マルコ広場をのんびりと一周して、来た道に戻り始めた。スキアヴォーニ海岸通りの街灯にはすでに明かりが灯っている。

「素敵な眺めね」彼女はそう呟いて立ち止まった。サン・マルコ運河の向こうにはサン・ジョルジョ・マッジョーレ島が浮かんでいた。

「私もあの星空みたいに輝きたいなあ」と彼女は言った。

「星空？」僕はそう言って空を見上げた。まだ、星は出ていない。

「絵本の中の星空よ」

「さっき読んだ絵本の？」

「そう、さっき読んだ絵本の中の夜空。私も自分の中のいろいろなものを磨いていくわ。一つずつね。そうすれば、いつの日か満天の星のように輝くはずよ。今は、

イタリア語と日本語のスキルを磨いていくわ。秋からはツアーコンダクターとしてがんばるわ。やりたいことは沢山あるから。一つずつがんばって磨いていかなきゃ」と彼女は言った。その声は自信と決意に満ちていた。

「ねえ、ジュン。あなたは何を磨いていく？」

「何から磨いていこうかなあ。ギターをもっと上手く弾けたらなあ。そうだ。ギターの腕を磨くよ」

「本当にギターを弾くのが好きなのね。そういえばまだ、ジュンのギター聴いてなかったわ。ねえ、ホテルに戻ったら弾いて聴かせて。バネッサももう戻っていると思うわ」

「わかった。じゅあ、そろそろ帰ろうか」

僕達は、ホテルに向かって歩き始めた。空は序所に暗くなっていった。空には一番星が輝いていた。

「星が出てきたね」と僕が言った。

「満天の星が輝くかしら」彼女はそう言って空を見上げた。

## ♪ Lisbon

リベルダーデ通りの緩やかな上り坂。僕は強い日差しの中を歩いていた。その日の朝、僕はリスボンに着いた。バルセロナからマドリッドを経由する夜行バスは、僕を太陽の国、ポルトガルへと運んできた。

旅先で出会ったマルコが言っていた。

「ぜひ、リスボンに来てくれ。夏の後半はずっとリスボンにいるから」

彼とはオランダのアムステルダムで出会った。小説家になるんだ、と言っていた彼。

「世界中を旅して、いろいろな人と出会うんだ。そして、その経験を元に小説を書くのさ。ただの旅行記じゃないぜ。冒険小説さ」そして彼は大航海時代のポルトガルの話をしてくれた。

僕は彼の言葉に誘われて、太陽の国へやってきた。



リベルダーデ通りを登りきったところにあるポンバル公爵広場。僕の予約したホテルはそこから歩いて10分くらいだったはずだ。地図を片手に小道に入って歩いていく。静かな夏の午前中。

探していたホテルはすぐに見つかった。四階建ての小さなホテル。外壁は緑色のタイルで飾られていた。

ホテルのフロントは気のいいおじさん。名前はサントス。ブラジルからやってきたと言っていた。彼は流暢な英語を話す。もう一人、となりにいた若い女性。彼女もホテルのスタッフだ。彼女はまるで英語が話せない。サントスは、僕と彼との会話を、そのつど彼女に通訳してあげていた。僕が遠く日本から来たこと。ヨーロッパの国々を一人で旅してきたことを。

そのたびに、彼女は驚いたり、目をまるくしたり。サントスの顔と僕の顔を交互に見ては、うなずいたり、笑顔になったりしていた。



案内された部屋は二階。黄色にオレンジの柄をあしらったベッドカバー。窓辺の小さな木のテーブルとランプ。そして、陽の光であふれていた。

ベッドに腰かけ、ギターを爪弾く。少し弦が傷んでいるようだ。僕はリュックの中から、真新しいギターの弦と音叉を取り出した。弦を張り替え、音叉で、丁寧にピッチを合わせる。換えたばかりの弦は、音がなじむのに少し時間がかかる。

僕は一フレッドずつ、確かめるように弦を弾いた。ここまでの旅の間、この小さなギターはいつも僕と一緒にだった。ギターは僕よりもずっと社交的で人気者だった。旅先では、見知らぬ人が僕のギターを見て話しかけてきた。ギターを手渡すと、彼らはうれしそうに弾いてみせ

た。ロック、ポップス、クラシック、ジャズ。ジャンルは様々だった。ギターを弾けない人達はポーズを決めて、僕に最高の笑顔くれた。

僕は、ベッドの上でメロディを奏でながら、これまでの旅で出会った人達のことを、思い出していた。



午後、僕は部屋を出た。誰もいないフロントの前を歩いてホテルの玄関へ。外の壁に寄りかかって立っていたのは、さっきの若い女性。彼女は僕の姿を見て、にっこりと微笑んだ。制服は着ていない。Tシャツにジーンズ姿だ。

休憩時間なのか、仕事が終わったところなのか。彼女は僕に話しかけてきた。しかし、何を言っているのかまるでわからない。僕はただ、笑顔を返すだけ。その笑顔を見て彼女はまた笑顔になる。僕達は身振り手振り、そして顔の表情だけで会話を楽しんだ。

僕は彼女に「バイ！」と言って歩き出す。

リベルダーデ通りを下り、バイシャ地区のショッピングエリアを抜ける。そこは海に面したコメルシオ広場。市庁舎の黄色い壁の色と赤い路面電車。そして透き通る青空。それは、どこか懐かしさを感じる風景。こどもの頃、絵本で見たような風景だった。

僕は強い日差しの中をサンタ・アポローニア駅方面へ向かって歩いてみた。すぐに単調な一本道にあきて、裏

道に入ってみる。そこからは、丘へと続く道が伸びていた。足の向くまま散策する。黄色、ピンク、グリーン、オレンジに塗られた家々の壁。

この町は本当に光にあれていた。マルコの言っていた、太陽の国。僕はそれを少しだけ垣間見た気がした。



僕はホテルに戻り、フロントで電話を借りた。マルコに電話するためだ。僕は彼から渡された電話番号へ電話をする。電話に出たのは女性だった。マルコはいないが、彼女が迎えにくるという。

「明日でどう？」と僕。彼の家はサン・ジョルジェ城の近くだと聞いていた。待ち合わせの場所は、城へと続く坂の途中にある、シャピートというレストランの前。

「建物の白い壁に大きくシャピートと書かれてあるわ」と彼女は言った。

横で話を聞いていたサントス。

「そこなら、ちょっと有名なレストランさ」と言って簡単な地図を書いてくれた。



翌日の午後、僕は待ち合わせの場所へ。建物の白い壁に大きくシャピートと書かれてあった。彼女は坂の上からやってきた。

「あなたがジュンね。マルコの言っていたとおりだわ」そう言って彼女は微笑んだ。まだ、二十歳そこそこだろ

うか。

彼女はマルコの妹。名前はジョアナ。おじいちゃんと両親、そして兄のマルコと住んでいる。彼女の家族はサン・ジョルジェ城近くで、観光客相手におみやげ屋さんをやっている。

「マルコはどうしたの？」と訊くと、

「一週間くらい前に旅に出たわ」と彼女。ギリシャに行ったらしい。

彼女は僕をサン・ジョルジェ城へと連れていってくれた。

「私、生まれる前からここに来ているのよ。お母さんのお腹の中にいた頃からね。私ね、ここが大好き。街とその向こうに広がる海が見えるでしょ。子供の頃は、お兄ちゃんとここでよく遊んだわ」そう言って彼女は笑った。

「マルコはジュンに何て言ったの？」

「うん、世界中を旅して、冒険小説を書くって言っていたよ」

「マルコはね。いつもそんなことばかり言っているのよ」

兄のことを話すときの彼女はとても楽しそうだ。

妹のジョアナはマルコと違い、家庭的な娘のようだ。付き合っている恋人と早く結婚して、子供がほしいと言った。恋人は市役所で働いているそうだ。

「私、いつかはおじいちゃんのおみやげ屋さんを継ぎたいの」

「じゃあ、マルコはどうするの？」

「マルコはおみやげ屋さんなんて興味ないわ。旅をして自由気ままに生きるのがあるのよ」と彼女は言った。

僕は、アムステルダムで出会ったときの、マルコの人懐っこい笑顔を、思い出していた。

僕はその日、マルコの家泊まった。マルコは留守だったが、彼のおじいちゃん、両親、妹が僕を暖かく迎えてくれた。はるか遠く、ユーラシア大陸の東のさらに向こうの小さな島国、日本。そこからはるばるやってきた僕が、彼らにとってはうれしかったらしい。海の幸をふんだんに使った郷土料理で僕をもてなしてくれた。



夕食後、おじいちゃんが僕を書斎に招いてくれた。そこには飛行機の模型が沢山、壁に飾られていた。木の骨組みに紙を張り合わせて作られた模型飛行機。

「ジュンのギターは小さいね。でもこっちのほうがもっと小さいよ。これを知っているかい？」

おじいちゃんはそう言って大事そうに楽器を出してきた。

「あっ、ウクレレだね」と僕は答えた。

おじいちゃんは、うれしそうににっこりと笑った。



「これはね、ブラギーニャというんだよ」

「ウクレレとそっくりだね」

「ウクレレは、ポルトガル人船員がハワイに持ち込んだブラギーニャが起源なんだよ」

「そうなの？」

「そう言われているよ。わし達ポルトガル人には、海を越えて冒険する血が流れているのさ。マルコもきっとその血を受け継いだんだな」 そう言って笑った。

「おじいちゃんは冒険は好きじゃないの？」

「わしかい。わしも若い頃はあちこち行ったよ。スペイン、エジプト、トルコ、それにイタリアにも行ったことがあるよ。今だって冒険は大好きだよ。サン・ジョルジェ城には世界中から観光客が来るんだよ。おみやげ屋をやっているから、みんなわしのお店にやってくるんだ。だから、世界中の人と出会うことができるのさ。今だって、こうやって日本から来たジュンと話しているだろう。これが今のわしの冒険さ。

わしは若い頃、いろんな仕事をしたんだよ。トラックの運転手に魚売り。港の荷役夫もやったな。酒場で用心棒みたいなこともしたよ。体力には自信があったからね。そうだ、これを見てごらん」

おじいちゃんはそう言って、模型飛行機を一つ、手にとって見せてくれた。

「飛行機はね。翼の形がみんな違うんだよ。風を捕ま

えやすい翼。風を捕まえにくいだが、捕まえるとよく飛ぶ翼。いろいろあるのさ。そこが面白いんだよ。人間だつてそうさ。みんな翼があるんだ。でも風の捕まえ方や飛び方は人それぞれ違うんだよ。マルコは今、それを学んでいるんだよ。マルコはわしの若い頃にそっくりさ」

マルコの話をするときのおじいちゃんはとてもうれしそうだった。

僕はその晩、おじいちゃんの若い頃のロマンスや武勇伝をいろいろと聞かせてもらった。



僕は翌日、みんなに別れをつけて、もう一度、サン・ジョルジェ城を訪れた。

眼下に広がる町並み、そしてその向こうに広がる海を見ていた。街を歩くと、カラフルに塗られた壁の家々に目を奪われた。黄色、ピンク、グリーン、そしてオレンジ色。でも、ここから見える街の色は、屋根の色、明るい茶色一色だった。

僕は、昨日のおじいちゃんの言葉を、思い出していた。人はみな翼を持っている。でもその翼はみな違う。そして、風の捕まえ方や飛び方もみな違うと。

僕の翼はどんな翼だろう。もう風を掴んで羽ばたいているのだろうか。それとも、これから風を掴むのだろうか。

## ♪ Pontevedra

僕は駅のベンチに腰を下ろし、たたずんでいた。その日の朝、僕はポルトガルのポルトから、8時発の国際列車に乗り込んだ。シンプルでローカル列車のようなその青い車体の列車は、スペインのビーゴへと僕を運んできた。列車で約3時間の旅で、僕はまた、スペインへと戻ってきた。この街で数日滞在してからフランスへ向かおう、と僕は考えていた。

ビーゴはガリシア州最大の都市だ。港町として栄えるこの街を訪れたのにはわけがあった。僕の好きなケルト文化の一つ、バグパイプ音楽。このスペインのガリシア地方にもバグパイプの一種、ガリシアンパイプと呼ばれる楽器があるという。そしてケルトの末裔が住むといわれるこの地方に興味をそそられた。だからこの街へとやってきたのだ。

時計を見ると、正午を少し過ぎたところ。国際列車の止まる駅としてはビーゴ駅は静かなところだった。ロビーには小さな売店とベンチがいくつかが並べてある。人影はまばらで、高い天井がいっそう、殺風景な景色を強調していた。



さて、これからどうしようか。まずは街の中心地へと

行ってみよう。そんなことを考えながら、ぼんやりと外の様子を眺めていた。駐車場に停車してある赤い車のボンネットを夏の日差しが照らしていた。ギターに手を伸ばし、弦を爪弾くととなりのベンチにいた女性がこっちを見た。さっきから、携帯電話で誰かと話をしていた。その僕を見る目は好意的なものではなかった。なぜか、いらいらしているような様子だった。僕はギターを爪弾く指を止めた。すると、彼女は立ち上がり、僕から離れていった。そして、電話をしながらロビーで行ったり来たりを繰り返し始めた。さっきからスペイン語でずっと電話の向こうの相手と話をしていた。時折、声を荒げるような様子を見せながら、それでもずっと誰かと電話で話を続けていた。

僕はまた外の様子を眺めながらギターを爪弾き始めた。早起きして列車に乗ったせいか、まだ、頭がぼんやりとしていた。

「静かにしてもらえるかしら」

突然、その声が聞こえた。英語だった。そしてそれが僕に向けられた言葉だということはすぐにわかった。さっきの彼女が僕の横に立っていた。もう電話は終わった様子だった。そして僕の前に移動すると、もう一度僕に言った。

「静かにしてもらえるかしら」

僕はギターを弾く指を止めた。そしてベンチに腰掛け

たまま彼女の顔を下から見上げた。軽くギターを爪弾いていただけだ。迷惑をかけるような事はしていないだろう、そう思ったが言葉には出さず、彼女の顔をじっと見ていた。彼女も僕の顔をじっと見ていた。これはトラブルになるかもしれないな、と感じたその瞬間だった。彼女の頬を一筋の涙が、すーっと流れ落ちた。

僕は驚いた。そして、「大丈夫？」と声をかけた。彼女は無言で僕のとなりに座った。そして、静かに僕からギターを取り上げた。ギターを抱えたままじっと動かない彼女は、怒りを噛みしめるような表情をしていた。そして激しい指さばきでギターを弾き始めた。それはフラメンコだった。彼女の激しい感情がギターの音色を通して伝わってきた。しばらく彼女のギター演奏は続いた。やがて指さばきは静かになっていき、最後は穏やかに終わった。彼女はギターを抱えたまま、大きく背伸びをし、ゆっくりと深呼吸した。そしてギターを僕に返した。ベンチからすっと腰を上げ、真っすぐに立ち上がり、振り返るように僕を見た。その顔からはさっきまでの険しい表情は消えていた。

「さあ、行きましょう」と彼女は僕に言った。

「えっ、どこに？君はだれ？」と僕は呟いた。



彼女はイザベル。商社勤めの26歳。さっきの駅での電話の相手は職場の上司。上司の仕事のミスが見つかり、

その上司が捕まらないからとクライアントから彼女に連絡があったという。至急対応してほしいと。事情を飲み込めない彼女は、上司の携帯電話に連絡した。すると彼はのりくりとそのトラブルを彼女に押し付けようとしたらしい。彼女の話では、上司は仕事にアバウトな中年男。いつもそんな調子で、彼女はトラブルに巻き込まれている。あまりに怒りがこみ上げてきて涙が一筋流れてしまったと言っていた。

「私、弱虫じゃないわよ。あの涙は怒りから流した涙だからね」と彼女は念を押した。

「わかったよ、イザベル。君は弱虫じゃないよ」と僕は言った。

駅から15分ほどで彼女が運転する車が止まった。

「さあ、降りて。着いたわよ」と彼女は言った。僕は車を降り、彼女の後について小さな三階建ての建物に入っていた。一階の小さなロビーから階段が伸びている。この建物の二階が彼女の家だった。

「ただいまー、お母さん」と言って彼女は玄関のドアを開けて入っていった。僕は後から

「こんにちは」と言ってついていく。

「ねえ、お母さん。彼はジュン。日本からやってきたんだって。2、3日うちにいるからよろしくね」と彼女。すると彼女の母親は

「いらっしやい、ジュン。まあ、そうなの、日本から。

よろしくね。ちょうどよかったわ。もうすぐお昼ご飯よ」  
そう言って、とてもうれしそうな顔をした。彼女のお母さんは突然の僕の訪問に驚くこともなく、ごく当たり前のように振る舞っていた。僕は一番奥のゲストルームに案内された。ゲストルームの中にはバスタブ、シャワー、トイレと一通り揃っていた。

お母さんはとても気さくな人だった。イザベルはお母さんと二人で暮らしていた。お父さんはすでに亡くなっている。お父さんは生前、観光ガイドをしていた。メインのお客さんは日本からの観光客だったようで、流暢な日本語を話せたらしい。そして、日本人のお客さんをよく自宅に連れてきては、もてなしていたらしい。だから、お母さんは僕を大歓迎してくれたのだった。

「うれしいわ。日本からのお客さんは何年ぶりかしら。主人が生きていた頃は、よく来ていたのよ。ジュン、魚料理好きでしょ。ここは港町だから魚がおいしいのよ。お昼は魚料理にしましょうね」とお母さんは上機嫌だった。

僕達は三人で一緒に食事をし、イザベルや彼女の家族のこと、この街の話をした。



食事が終わると彼女の母親はお昼寝をするといって寝室へ行った。僕はイザベルに連れられて、車でビーゴ観光へ向かった。僕は車の中で彼女に訊いた。

「仕事には行かなくていいの？」

「うん。今日はもう帰るって言ってやったわ。どうせ、明日は土曜で休みだからね。あいつ、ホントにイラつくのよね。懲らしめてやったほうがいいのよ」

「でも、そんなことして大丈夫？クビになったりしない？」と僕は少し心配になった。

「大丈夫よ。逆に私があいつをクビにしてやるわよ」と言って笑った。

「ねえ、イザベルの会社って商社って言ってたよね。どんな仕事しているの？」

「海産物の輸出をしているのよ。そういえば、この前、日本へ海産物を大量に送ったわ。なんだと思う？」

「なんだろう？変わった魚？」

「タコよ。冷凍のタコ。ビーゴのタコは日本人に全部食べられちゃうわね」と言って彼女は笑った。

「ホントに？スペインでもタコを食べるの？」

「うん、ガリシアでは食べるわよ。だっておいしいでしょ。ジュンは食べないの」

「僕も食べるよ」

「でもジュン、ビーゴのタコを全部食べちゃだめよ。私達のも残しておいてくれなくちゃね」そう言って彼女はまた笑った。

「ねえ、ジュンはなぜビーゴにやってきたの？スペインだとバルセロナやマドリッドは有名だけど」



「うん、ガリシア地方にもケルト文化が残っているって聞いてね。スコットランドやアイルランドのバグパイプや音楽が好きだからさ。ガリシアンパイプスの音色も聴いてみたかったんだ」

「ガリシアンパイプス? ああ、ガイタのことね」

「ガイタって言うんだ。イザベルは好き?」

「私はあんまりかな。ちょっと古い民族音楽って感じね。私はポップスが好き。あと情熱のフラメンコね」

「さっきは、すごかったね。フラメンコギター。ギター上手だね」

「そう? ありがとう。最近ギターほとんど弾いてなかったから。でも久々に弾いたら、なんか気分がすっきりした。ギターっていいわね」

「うん、ギターっていいよね」と僕はうなずいた。

僕は彼女の案内でビーゴの街を観て回った。港周辺やカストロ城、サミル海岸、プリンシペ通りなど、その日はあちこち訪れた。



翌日の午後、僕達はまた、彼女の車に乗って出かけた。そして、午後3時頃に目的地に到着した。

「ここが、ポンテベドラよ。川の向こう側には私が大学時代に通ったキャンパスがあるの。そしてこっち側が旧市街ね。中世からの古い町並みが残っているのよ。学生時代はこっちに住んでいる叔父さんの家に下宿してい

たの。懐かしいわ。ずっと来てなかったから。さて、どこから案内しようかなあ」そう言って彼女はチャーミングな笑顔を見せた。

ここポンテベドラはビーゴとサンティアゴ・デ・コンポステーラとの中間に位置している。サンティアゴ・デ・コンポステーラはガリシア州の首都があり、カトリックの三大巡礼地の一つとしても有名な場所だ。

この街の中心にある広場はペレグリーナ広場。丸みをおびた外観のペレグリーナ教会が建っている。そこから僕達は旧市街を観て回った。石畳みの細い路地の左右には歴史を感じさせる古い建物が並んでいる。

「ここよ、私がジュンを連れてきたかった場所は」そう言って彼女は僕をとある建物の中に案内した。そこはガイタを展示してある博物館だった。沢山のガイタが展示してあり、写真もあった。歴史を感じさせる古い写真の数々。その中にガイタ奏者達が正装して並んでいる写真があった。

「あれ、彼らはスカートを履いていないの？スコットランドやアイルランドのバグパイプ奏者達みたいに」

「ガリシアのバグパイプ奏者達はスカートを履かないのよ。がっかりした？」

「ううん。でもちょっとイメージと違ってたから」

「ガリシアでは独自の発展をしたのね。ねえ、知ってる？私達ガリシア人は独自の言葉を持っているのよ。ガ

リシア語っていう」

「ホントに？スペイン語じゃなくて」

「もちろんスペイン語も話すわよ。でももう一つ、ガリシア語も話すのよ。ガリシアはね、スペインの中でも独自の文化を持っているのよ。だから、ジュンがガリシアに興味を持ってきてくれてうれしいわ」

彼女はそう言って笑顔を見せた。

僕達は博物館を後にして、また狭い路地を歩いた。すると突然、小さな広場に出た。広場の入り口ではメガネにヒゲ、そして帽子姿のおじいさんのブロンズ像が僕達を迎えてくれた。その向こうでは人だかりが出来ていて、そこから音楽が聞こえてきた。

「あれがガイタよ。近くに行ってみましょう」と彼女は指さした。近づいていくと、それはバグパイプの音色だった。しかし、それはスコットランドやアイルランドで聴いた音楽とは少し違った印象だった。彼らが身につけていた民族衣装もスコットランドやアイルランドのバグパイプ奏者のそれとは違っていた。

「やっぱり、スカートは履いていないんだね」と僕は呟いた。

「もう、そんなにスカートがよかったの？明日はスカートを履いてあげるから、今日はジーンズでがまんして」と彼女が言った。彼女はグレーのジーンズを履いていた。

「いや、そうじゃなくて、あの衣装のことだよ」

「わかってるわよ。からかっただけよ。何赤くなってるのよ。ばかね」と彼女はちょっといたずらっぽく笑った。僕もつられて照れ笑いをした。

僕達はその後、レーナ広場へと向かった。小さな広場の真ん中には十字架が建っていた。二階建てや三階建ての建物が広場を囲むように建てられている。広場には沢山のテーブルとイスが並んでいて、大勢が食事やおしゃべりを楽しんでいた。

「ねえ、あの建物を見て。かわいいでしょ」と彼女は、広場を挟んで正面に建つ建物を指さした。石造りの三階建てで、『Restaurante Rúas』の緑色の文字が見えた。一階部分はアーケードになっていてテーブルがある。その奥にレストランの入り口ドアがあった。二階には石壁に埋め込まれた、緑色の木枠の両開きの窓が三つ。三階は、小さく区切られた緑色の木枠に窓ガラスがはめ込まれ、全面ガラス張り。屋根にはオレンジ色の瓦が乗っていた。それはとてもかわいらしい建物だった。

「へえ、面白いね。初めて見るよ」と僕。

「あれはね、ガリシア独特の建築様式なのよ」と彼女は言った。

ちょうどそのとき、広場のテーブルの一つを陣取る4、5人の集団が僕達を手招きした。彼らはイザベルの大学時代の友人達だった。イザベルは大学時代の友人達にも連絡をとっていたのだ。そして、この広場で待ち合わせ

をしていたのだった。

「ひさしぶり、元気だった？」とみんなイザベルを歓迎した。

「そちのギターを持った彼は誰？新しい恋人？」とその中の一人が言った。

「彼は、ジュン。日本から来たの。昨日知り合ったばかりよ」

「へえ、日本から来たのかあ。ジュン、ガリシアによろこそ」

「ねえ、ジュン、お願いがあるんだけど…」と別の一人が言った。

「何？」

「ガリシアのタコ、全部食べちゃわないでね…」とその娘はからかうようにくすっと笑った。

「また、その話かあ。まいったなあ。はははっ」

僕の笑う姿を見て、他のみんなも大笑いした。

「ねえ、ジュン。そのギター貸して」とまた別の一人が言った。

「うん、いいよ」と言って僕は彼にギターを手渡した。すると彼はギターを弾いてスタンドバイミーを歌いだした。他のみんなも一緒になってスタンドバイミーを歌いだした。イザベルも歌いながらとてもうれしそうな笑顔になっていた。それは、昨日、駅で出会ったときのイザベルとはまるで別人のようだった。その様子を見ながら、

仲間って本当にいいな、と僕はしみじみと感じていた。  
僕達のテーブルは笑顔と明るい歌声、そしてガリシアの  
眩しい夕陽に包まれていた。

## ♪ Paris

パリのリヨン駅。僕はTGVを降り、プラットフォームを抜けた。フランスに入って、アルル、アビニオンと古都を巡ってきた僕。そして、旅の最終目的地、パリに着いたのだ。

パリの空はすがすがしく、青かった。それは、東京で見ていた夏の空とは、違って見えた。湿度が低いからだろうか。大気が透明に見えた。雲の形はくっきりとしていた。高層ビルが少ないパリでは遠くの空まで見渡すことができた。



僕はいくつかのホテルを見てまわった。そして、カルチェ・ラタン地区にある安いホテルの最上階に部屋を見つけた。テラスから見る空はあいかわらず、透き通っていた。青空にはクロワッサンのような白い雲がきれいに並んでいた。

僕は部屋に入ってすぐに、シャワーを浴びて汗を流した。旅の出会いと興奮をシャワーでクールダウンする、この気持ちよさ。僕が旅で身につけた習慣の一つだ。

ベッドの上でリュックを開け、ガイドブックを取り出す。姉が残してくれたパリのガイドブック。僕はそこにある姉が書き残したメモを見ていた。いくつかの店には

行ってみよう、そう思った。

午後のひとときをベッドの上でのんびりと過ごした僕。旅の途中で出会った人達のことを思い出していたら、いつしか眠ってしまった。



時計を見るともう夕方になっていた。僕はガイドブックを片手に、とあるレストランへと向かった。予約なしでも食事ができるカジュアルなレストラン、そう書かれてあった。

店に入るとさっそく、店員が近づいてきた。フランス語で話され、少しとまどう。

「英語をお願いします」と返す僕。

「ご予約はございますか？」と今度は英語で尋ねる店員。僕が予約はしていないことを告げると、

「本日はご予約なしでは、お席をご用意できません」との返事。

言葉は丁寧だが、その少し傲慢な態度に、戸惑う僕。

フランス料理はまた今度にしよう。そう思って振り返ると一人の女性と目が合った。きれいなブロンドのロングヘア。40歳くらいだろうか。彼女は優しく、にっこりと微笑んだ。そして、先ほどの店員に何か話をした。すると店員の態度はがらりと変わった。

彼女は僕に、

「一緒に食事はどう？」と言った。



「いいんですか」僕は突然の誘いに少し驚いた。

テーブルにつくと、彼女はワイン、僕はペリエを頼んだ。彼女はセリーヌ。ここの常連客らしい。外国人にアパートを仲介する不動産業者だと言った。

「あなた日本人でしょ」

「なぜわかるの？」

「日本人は独特の雰囲気を持っているのよね」と彼女は、自信ありげに言った。

前菜、サラダ、魚料理、肉料理と彼女がひととおり注文してくれた。僕は、彼女と店員のやりとりを黙って見ていた。

「私、日本へは三度行ったことがあるわ。京都でしょ。それと奈良。東京にも行ったことがあるわ。日本人はみんな親切だったわ。私、日本が大好きよ」

彼女は、日本人の僕と食事することが楽しそうだった。旅先で日本を好きな人に出会うと、こちらまでうれしくなる。

「それってギター？」と彼女は僕のギターを見て言った。

僕はこのギターとヨーロッパを一人で旅してきたと言った。そしてここパリが最終目的地であることも。

「へえ、すごいわね」彼女は少し大げさなぐらいに驚いてみせた。

「そのギター、ちょっと貸して」そう言って、彼女は

ギターを抱え、弦を弾いてみせた。

「ギター弾けるの？」と訊く僕に、彼女はにっこり笑って、

「全然、弾けないわ。今度教えて！」と言ってウインクした。

パリでの最初の夜、僕は素敵な女性と、素敵な時間を過ごすことができた。レストランを出て、別れ際に、彼女は名刺をくれた。

「気が向いたら、電話してね。観光案内してあげるわ」  
そう言って、僕に挨拶のチークキスをして去っていった。



僕とラウラは約束どおり、パリで再会した。ラウラがパリに来てから、僕達は二人でパリの時間を楽しんだ。エッフェル塔、セーヌ川の遊覧船、ルーブル美術館。凱旋門にシャンゼリゼ通り、そしてオペラ座。

パリでは彼女が僕の案内役だった。彼女が持参したパリの観光マップには、沢山の印が付いていた。僕とのパリ旅行のために、しっかり準備をしていたのだ。

ディスプレイデザイナーの彼女にとって、パリはとても魅力的な街であるようだ。パリでの日々はあっという間に過ぎていった。

彼女が僕を連れて行ってくれた場所の一つが、マルモッタン美術館。パリ郊外の静かな住宅街の一角にある。そこにはモネの代表作、睡蓮が飾られていた。モネは睡

蓮をテーマに多くの作品を残した。

僕は、それら睡蓮の連作の前で物思いにふけていた。一つのモチーフ、テーマについて描き続けるという行為。それは、自分が大切に思っているモノや風景を自分の心に留めたい、そう思う気持ちに似ているのではないかと。

「睡蓮が気に入ったの？」彼女はそんな僕を見て言った。

僕達は、最後にミュージアムショップに立ち寄った。

そこで僕は、一冊のモネの画集を手にとった。そこにあった一枚の絵画。僕はその絵に心を奪われていた。そこには白いドレスを身にまとい、日傘を差した女性と少年が描かれていた。

「それはね、モネの代表作の一つ、『日傘の女』よ」と傍らにいた彼女は言った。

「その絵はね。モネが彼の奥さんと息子さんを描いた絵なのよ。『日傘の女』はね、3枚あるのよ。この絵の他に、奥さんの死後に描かれた2枚。そっちの2枚には息子さんは描かれていないの」

「へえ、そうなんだ。素敵な絵だね」と僕は言った。

美術館を出た後、僕達は、すぐ近くの公園に行った。芝生で覆われた静かな公園には、僕達以外だれもいなかった。陽の光が芝生の緑を輝かせていた。

僕はその芝生に座り込んで彼女に言った。

「ねえ、ラウラ。ちょっとそこに立ってみて」

「えっ、どうしたの？」

「うん。パリでのラウラの姿をしっかり見ておこうかと思って」

「やだ、はずかしいわ」そう言って彼女は顔を赤くした。

「お願い。もう少し、そのままです」

僕は、夏の日差しの中に立つ彼女の姿を、心に焼き付けていた。彼女はチューリッヒのときの同様に、白いワンピースを着ていた。それは無地の白い、膝丈のワンピースだった。



その日は朝から曇って、どんよりとしていた。僕はその日の午後、モンマルトルの丘にいた。サクレ・クール寺院の近くにある静かな公園。ときどき、雲が薄くなって、陽が差し込んできた。

少し離れたところには、ベビーカーに赤ちゃんを乗せた夫婦がいた。お父さんは手を叩いてリズムをとっていた。赤ちゃんはそのリズムに合わせて、体をゆらして、笑っていた。お母さんは、その二人の様子をうれしそうに眺めている。

僕の傍らにはラウラがいた。有名なムーランルージュを観たあと、僕達はサクレ・クール寺院を見学した。そして、二人は今、この公園にいた。僕達は芝生に腰を下ろしていた。彼女は僕のとなりでスケッチを描いていた。

写真を撮るより、スケッチするほうが好きなようだ。

僕は一度、そのわけを彼女に訊いたことがある。

「スケッチは心に残ったものだけを写しとれるから好きなの」と彼女は言っていた。

空を見上げると雲が厚くなっていた。赤ちゃんを連れて家族は、いつの間にかいなくなっていた。僕達は二人だけになっていた。彼女はまだスケッチを続けていた。僕は傍らでギターを爪弾き始めた。彼女はスケッチをしながら、

「ジュンはいつもその曲『ダニーボーイ』を弾いているわね。その曲が好きなのね」と言った。

「いつも弾いてる？」

「ええ、いつも弾いているわ」

「そうかあ…。いつも弾いているのかあ」

「ねえ、その歌の物語知ってる？」

「知らないなあ。どんな話なの」

「その歌はねえ、母親の気持ちを歌った歌だって言われているのよ。戦場に行って戻ってこない息子ダニーボーイを想う、切ない母親の気持ちを歌った歌なんだって。でも、他の解釈もあるみたい。旅立っていった恋人を想う、切ない女心を歌っているとかね」

僕は彼女のその話を聞いて、あの日の出来事を思い出した。姉と二人で虹を見たあの日。家に戻った後、姉は二階の部屋で独りでギターを弾いていた。陽がほとん

ど沈んで薄暗くなった部屋で、姉はイスに腰掛けギターを爪弾きながら静かに歌っていた。いつもはギターでメロディを奏でるだけの姉は、その日は珍しくギターを伴奏に歌っていた。彼女は僕に気づいてギターを弾く指を止めた。ギターを置いてゆっくりと僕に近づいてきた。そして膝を下し僕と同じ目線になった彼女は、両手を僕の肩に添えた。

「ジュンの瞳はきれいね。真っすぐで、正直で、芯の強い目をしているわ。お姉ちゃんはジュンの瞳が大好きよ…」

そう言った後に小声でぽつりと言った。

「あの人の目にそっくり…」

「ねえ、あの人ってだれ？」と無邪気に訊く僕に、

「ううん、なんでもないのよ」と姉は静かに微笑んだ。

そのときの姉はとてもやさしい目をしていて、いつものようにやさしい笑顔の中でその瞳には愛情があふれていた。

「僕はお姉ちゃんの優しい目が大好きだよ」

「本当に？ありがとうございます。ジュンの目もお姉ちゃんと同じ優しい目をしているわよ」と姉は言った。そして両腕で僕をぎゅっと強く抱きしめた。

あの日、夕暮れの中で姉が歌っていた歌は『ダニーボーイ』だった。

ラウラは物思いにふけている僕に、

「ジュンはなぜ、ロンドンからパリまで一人旅をしてきたの？」と訊いた。

彼女の声は、穏やかで優しさにあふれていた。

僕は、自分のことを話し始めた。僕が歳の離れた姉に育てられたことを。そして、その姉が病に倒れ、亡くなったことを。姉の残してくれたガイドブックのことを。

僕はきっと、自分の心に整理をつけたかったのだ。だから、ロンドンとパリの間には多くの都市を訪れ、多くの人と出会ったのだろう。それは、無意識の行動だったのかもしれない。姉の死をまだ心のどこかで受け入れられない自分がいた。

ロンドンからすぐにパリに行ってしまうえば、僕と姉の旅はすぐに終わってしまっていただろう。僕は、旅の終わりを受け入れる心の準備をしていたのかもしれない。旅の終わり、それは姉の死を受け入れることだったから。彼女に話しながら、僕はそう思った。

気がつくとき、彼女はスケッチの手を止め、僕をじっと見ていた。何も言わず、ただ、僕の瞳を見ていた。

そのとき、一匹のトンボが僕達の近くに飛んできた。

彼女はそれを見て、

「トンボはかつてジャポニズムの象徴だったのよ。ガレヤリックもトンボを作品のモチーフにしていたわ」と言った。

僕は人差し指を差し出した。トンボは僕の指にとまった。

彼女も同じように人差し指を差し出す。すると今度は彼女の指にとまった。そして、しばらく羽を休めると、どこかへ飛んでいってしまった。彼女はちょっと驚いたようだった。

「あのトンボ、私達に挨拶に来たみたいね。ジュンが日本から来たってわかったのかしら」

そう言って、いつものように優しい笑顔を見せた。



空は今にも雨が降り出しそうな気配だった。僕達は急ぎ足でモンマルトルの丘を降りた。地下鉄の駅の手前まで来たとき、雨がいきなり降り出した。

僕達は地下鉄の駅構内へ飛び込んだ。切符売り場と改札の前には、雨宿りをする人達があふれていた。どしゃぶりの雨が外で激しい音と立てている。

少し離れたところに、カップルが肩を寄せ合っていた。僕達と同世代だろう。急な雨でその娘の髪は濡れていた。ラウラもそのカップルに気づいているようだった。

僕達は、ただ黙って外の雨音を聞いていた。僕と彼女が無口になったのは、激しい雨音のせいだけではなかった。パリでの時間は、あっという間に過ぎていった。それは二人にとって夢のような時間だった。だが8月もう終わりに近づいていた。

僕も彼女も明後日の朝には帰国する。僕は日本へ。彼女はスイスへ。僕達は互いに帰国の話題を避けていた。



だが、この激しい雨が、二人を現実に戻していた。



やがて、激しい夕立が止んで小雨になった。地下鉄の入り口付近で雨宿りをしていた人達が、ざわざわと動き始めた。気がつくと、僕達二人だけがポツンと取り残されていた。

「少し歩こうか。雨も上がったし」と僕が言った。

「うん」と彼女が答えた。

僕達は雨上がりのパリの街を歩いた。

「明日はどうしようか？ラウラ」

「うん」

「どこか美術館に行こうか？」

「うん」

「ショッピングに行こうか？それともどこかでのんびり過ごす？」

でも彼女は、「うん」と答えるだけ。

やがて二人のぎこちない会話が途絶え、二人は無言になっていた。ただ、つないだ手からお互いのぬくもりを感じとっていた。



どれくらい歩いたろうか。空はいつの間にか明るくなり、ところどころ青空が見えていた。気がつくと二人はセーヌ川にかかる橋の上に立っていた。

「ずいぶん歩いたね。疲れてない？ラウラ」

「うん、大丈夫」

橋の上では、ストリートミュージシャンが奏でるウッドベースの音が、静かに響いていた。

そのとき、彼女が、「あっ」と小さな声をあげた。空に大きな虹がかかっていた。夕暮れの斜めから射す太陽は空の青さをいっそう際立たせている。建物は夕陽を浴びて金色に輝いていた。そして、その向こうには、くっきりと七色に輝く虹が出ていた。

彼女はうれしそうに、いつもの笑顔で僕を見た。

そして、もう一度虹を見て、何かを呟いた。

それはフランス語だから、僕にはわからなかった。

僕も虹を見ながら、日本語で呟いた。

「ねえ、今何て言ったの？ ジュン」と彼女は僕を見た。

「ラウラは何て言ったの？」僕も彼女を見て訊いた。長いまつ毛が夕陽を浴びて輝いていた。

「教えてあげない。ねえ、ジュンは何て言ったの？」彼女はまっすぐに僕の瞳を見ていた。

ウッドベースの音は、まだ静かに響いていた。

「ねえ、ラウラ。もう少し、二人でパリにしようか」と僕は応えた。

彼女は少し驚いていた。そして、少しだけ強く、僕の手を握り返した。



僕達は黙って虹を見ていた。僕は小さい頃に見た、あ

の日の虹を思い出していた。

「ねえ、虹の向こうへ行ってみたいと思ったことある？」

「えっ、虹の向こうへ？」

「そう。思ったことない？」

「虹の向こうかあ。面白そうね。でも私はここから見ているほうがいいわ。あなたといっしょに、あのきれいな虹を眺めていたいわ」

「でも…」と彼女は言った。

「でも？」

「もし、ジュンが連れて行ってってくれるなら、行ってみたいわ」

僕は彼女のその言葉を聞いたとき、僕のこの旅が終わったと感じた。そしてあの日の風景を思い出した。煙突から出る黒い煙が白い色へと変わったあの時のことを。あの時、僕の心の中に、色のないモノクロームの世界が広がっていった。それ以来、僕の心は色のない世界を彷徨っていた。

しかし今、色鮮やかな何かが僕の心の中に流れ込むのを感じていた。そしてそれは、僕の心を温かくした。この出会いを大切にしたい、そしてこれからの時間を大切に生きていきたいと思った。

僕は彼女を抱き寄せ、キスをした。虹は遠くから僕達を優しく見ている。



## ♪ Epilogue

その日の午後、僕とラウラはセリーヌに会いに行った。僕がパリにやってきた最初の日に、レストランで偶然出会ったあの日本好きの女性だ。僕はセリーヌにラウラを紹介した。そして、もうしばらく二人で、パリで過ごすかと思っていると伝えた。セリーヌは僕がラウラを連れて訪ねてくれたことをとても喜んでくれた。そして、うれしい申し出をしてくれた。セリーヌの自宅兼事務所の一部屋を僕達が使っていていいと言ってくれたのだ。ラウラのディスプレイデザイナーのスキルを活かしてセリーヌの手伝いをしてみないかとも言っていた。彼女が取り扱っている物件のインテリアデザインを手伝ってほしいというのだ。さらに僕のエディターとしての経験を活かしてガイドブックの編集の仕事をしてみてはどうかとも言っていた。彼女は不動産業界以外にもいろいろ知り合いがいるようだった。



しばらくして僕達はセリーヌの事務所を後にした。その帰りにプロムナードプランテという名の公園をのんびりと二人で歩いた。以前は鉄道が走っていた高架橋がそのまま豊かな緑で覆われている。途中には池や緑のアーチがある全長4キロほどの遊歩道だ。

「まずは、セリーヌさんの家へ引っ越しね」

「そうだね。でもホテルから荷物を運ぶだけだけれどね」

「そうね。私は荷物といえばスーツケースが一つあるだけだわ」

「僕もリュック一つとギターだけだよ」

「そう言えば、ジュン。今日はギターを持っていないのね」

僕は彼女にそう言われて気がついた。旅の間中いつも持ち歩いていたギターはあの日以来、ホテルの部屋に置いたままだった。二人で虹を見たあの日から数日しか経っていなかったが、僕の中で何かが変わっていた。あの虹を見たあの瞬間を境に僕達の関係も変わっていた。口には出さなかったが、彼女もそれを感じているようだった。お互いの未来の中にお互いの存在を確かに感じていた。

「パリでインテリアデザインのお仕事をできるなんて夢みたい。ジュンもエディターの経験を活かせそうね」と彼女は上機嫌だった。いろいろな不安も心をよぎったが、今はこの幸せにかけてみたい、僕はそんな気持ちだった。彼女もきっと同じ気持ちだったのだろう。

僕達が遊歩道にあるベンチに腰を下ろすと左から犬を連れた若いカップルが歩いてきて僕達の前を通り過ぎて行った。

「ねえ。あの女性、いかにもパリジェンヌって感じね。  
素敵だわ」

「そうだね」と僕は頷いた。

「あれはフレンチブルドッグね。ほら、あのおしりを見て。かわいいわね」

「ブルドッグ？」

「うん。フレンチブルドッグ」

「ブルドッグって、あのブルドッグ？」

「ジュンの言っているブルドッグってイングリッシュブルドッグのことね。シワだらけの顔をしたわんちゃん」

「そうそう。耳が垂れていてシワだらけの顔をした太ったブルドッグ」

「それはイングリッシュブルドッグ。あれはフレンチブルドッグよ」

「ブルドッグにもイングリッシュやフレンチがいるの」

「そうよ。フレンチブルドッグは大きな耳がピンと立っているの。それと小さいお尻が特長なのよ」

「へえ、そうなんだ」

「うん、そうなのよ。かわいいわね、フレンチブルドッグ。いつか飼いたいなあ」

「そうだね。あんなにかわいいのがいたら毎日楽しいだろうね」と僕は頷いた。彼女はまだ、さっきの犬を連れてカップルの後ろ姿を見ていた。かわいい犬を連れてパートナーと歩くパリジェンヌに自分の未来の姿を見て

いたのかもしれない。彼女の横顔を見ていると僕はふと、ある考えが頭に浮かんだ。

「ねえ、ラウラ」

「何？うれしそうな顔をして」

「マリオネットじゃだめかな」

「マリオネット？」

「そう、マリオネットのフレンチブルドッグ」

「マリオネットのフレンチブルドッグ？」と彼女は目を丸くした。

「今は本物の犬は飼えないけど、マリオネットのフレンチブルドッグなら大丈夫だろう」

「マリオネットって糸で吊して動く人形のこと？」

「そう。マリオネットのブル。外に連れ出すこともできるよ」

「どこで買うの？」

「僕が作るんだよ」

「作るって、どうやって」

「木を削って色を塗ってさ」

「ずいぶん簡単そうに言うけどホントに作れるの？」

「うん、作れるさ。手先は器用だからね」僕がそう言うのと彼女は目を輝かせた。

「大きな耳のフレンチブルドッグよ」

「うん、わかった。大きな耳だね」

「白いフレンチーがいいなあ」

「フレンチー？」

「フレンチブルドッグのことよ」

「へえ、フレンチーって言うんだ」

「そう、フレンチーって言うのよ。目の回りと耳が黒いのがいいわ」

「オッケー。まかせて」

「口もパクパク動くわよね」

「もちろん、パクパクと動くよ」

「名前は何にしようかなあ」

「名前はもう決めてあるんだ」

「もう決めたの？何て名前？」

「ジニー」

「ジニー？なんでジニーなの？」

「うん、それはね…」僕は言いかけてやめた。一瞬僕の視線は遠くを見つめた。スコットランドのエジンバラで出会った人形使いのヤナの言葉を思い出していた。そして

「できあがったら教えてあげるよ」と言って彼女に視線を戻した。

「今は教えてくれないの？」

「うん。できあがってからの楽しみ」

すると彼女は僕の顔を覗き込んだ。そして

「わかったわ。できあがってからの楽しみね。ジニー・ザ・マリオネットフレンチー」と言った。



「ジニー・ザ・マリオネットフレンチ」と僕も彼女の言葉を繰り返した。

ふと見上げると、小さな丸い雲が青空にぽっかりと浮かんでいた。彼女は僕の視線の先に目を移し、

「あっ、あの雲を見てたんでしょう。クロワッサンみたいだって思ってたんじゃない？ 食いしん坊ね」と僕を突いた。

「わかった？ ちょっとお腹空いたね。何か食べに行こうか？」

僕がそう言うと彼女はうれしそうに微笑んだ。そしてベンチから立ち上がった。白い膝丈のワンピースからすーっと長い脚が伸びていた。